

猫と庄造と二人のをんな

谷崎潤一郎

青空文庫



福子さんどうぞゆるして下さい此の手紙雪ちゃんの名借りました
 けどほんたうは雪ちゃんではありません、さう云ふたら無論貴女
 は私が誰だかお分りになつたでせうね、いえく貴女は此の手紙
 の封切つて開けたしゆん間「扱さげはあるの女か」ともうちやんと気が
 おつきになるでせう、そしてきつと腹立てゝ、まあ失礼な、……
 ⋮友達の名前無断で使つて、私に手紙よこすとは何と云ふ厚かま
 しい人と、お思ひになるでせう、でも福子さん察して下さいな、
 もしも私が封筒の裏へ自分の本名書いたらきつとある人が見つけ
 て、中途で横取りしてしまふことよう分つてるのですもの、是非ぜひ
 共あなたに読んで頂いただかう思ふたらかうするより外ないのですもの、
 けれど安心して下さいませ、私決して貴女に恨み云ふたり泣なき言ごと



聞かしたりするつもりではないのです。そりや、本氣で云ふたら此の手紙の十倍も二十倍もの長い手紙書いたかて足りない位に思ひますけど、今更そんなこと云ふても何にもなりわしませんものねえ。オホヽヽヽヽヽ、私も苦労しましたお蔭^{おかげ}で大変強くなりましたのよ、さういつもく泣いてばかりゐませんのよ、泣きたくことや口惜しいことたんとくありますけど、もうく考へないことにして、できるだけ朗^{ほがら}かに暮らす決心しましたの。ほんたうに、人間の運命云ふものいつ誰がどうなるか神様より外知る者はありませんのに、他人の幸福を羨^{うらや}んだり憎んだりするなんて馬鹿げてますわねえ。

私がなんぼ無教育な女でも直接貴女に手紙上げたら失礼なことぐ

らる心得てますのよ、それかて此の事は塚本さんからたびく云ふて貰ひましたけど、あの人どうしても聞き入れてくれませんので、今は貴女にお願ひするより手段ないやうになりましたの。でもかう云ふたら何やたいそうむづかしいお願ひするやうに聞えますけど、決してくそんな面倒なことではありません。私あなたの家庭から唯一つだけ頂きたいものがあるのです。と云ふたからとて、勿論貴女のあの人を返せと云ふのではありません。実はもつとく下らないもの、つまらないもの、……リヽ一ちやんがほしいのです。塚本さんの話では、あの人はリヽ一なんぞくれてやつてもよいのだけれど、福子さんが離すのいやゝ云ふてなさると云ふのです、ねえ福子さん、それ本当でせうか？ たつた

一つの私の望み、貴女が邪魔してらつしやるのでせうか。福子さんどうぞ考へて下さい私は自分の命よりも大切な人を、……いゝえ、そればかりか、あの人と作つてゐた楽しい家庭のすべてのものを、残らず貴女にお譲りしたのです。茶碗のかけ一つも持ち出した物はなく、こしふれ入の時に持つて行つた自分の荷物さへ満足に返しては貰ひません。でも、悲しい思ひ出の種になるやうなものない方がよいかも知れませんけれど、せめてリヽ一ちゃん譲つて下すつてもよくはありません？ 私は外に何も無理なこと申しません、踏ふまれ蹴けられ叩かれてもじつと辛抱しんぱうして來たのです。その大きな犠牲に対して、たつた一匹の猫を頂きたいと云ふたら厚かましいお願ひでせうか。貴女に取つてはほんにどうでもよいや

うな小さい獣けものですけれど、私にしたらどんなに孤独慰められるか、……私、弱虫と思はれたくありませんが、リヽ一ちゃんでもゐてゝくれなんだら淋しくて仕様がありませんの、……猫より外に私を相手にしてくれる人間世の中に一人もゐないのですもの。

貴女は私をこんなにも打ち負かしておいて、此の上苦しめようとなさるのでせうか。今の私の淋しさや心細さに一点の同情も寄せて下さらないほど、無慈悲なむじひお方かたなのでせうか。

いえ／＼貴女はそんなお方ではありません、私よく分つてあるのですが、リヽ一ちゃんを離さないのは、あなたでなくて、あの人ですわ、きつと／＼さうですわ。あの人はリヽ一ちゃんが大好きなのです。あの人いつも「お前となら別れられても、此の猫とや

つたらよう別れん」と云ふてたのです。そして御飯の時でも夜寝る時でも、リヽ一ちゃんの方がずっと私より可愛がられてゐたのです。けど、そんなら何で正直に「自分が離しともないのだ」と云はんと、あなたのせゐにするのでせう? さあその訳をよう考へて御覧なさりませ、……

あの人は嫌な私を追ひ出して、好きな貴女と一緒にになりました。

私と暮してた間こそりヽ一ちゃんが必要でしたけど、今になつたらもうそんなもん邪魔になる筈はずではありませんか。それともある人、今でもリヽ一ちゃんがゐなかつたら不足を感じるのでせうか。そしたら貴女も私と同じに、猫以下と見られてるのでせうか。まあ御免なさい、つい心にもないこと云ふてしまって。……よも

やそんな阿呆らしいことあらうとは思ひませんけれど、でもあの
人、自分の好きなこと隠して貴女のせゐにする云ふのは、やつぱ
りいくらか気が咎めてゐる証拠では、……才ホヽヽヽヽヽ、も
うそんなこと、どつちにしたかて私には関係ないのでしたわねえ、
けどほんたうに御用心なさいませ、たかゞ猫ぐらゐと氣を許して
いらしつたら、その猫にさへ見かへられてしまふのですわ。私決
して悪いことは申しません、私のためより貴女のため思ふて上げ
るのです、あのリヽ一ちゃんあの人の側から早う離してしまひな
さい、あの人それを承知しないならいよく怪しいではあります
んか。……

福子は此の手紙の一字一句を胸に置いて、庄造とりゝーのすることにそれとなく眼をつけてゐるのだが、小鰈の二杯酢を肴にしてチビリ／＼傾けてゐる庄造は、一と口飲んでは猪口を置くと、

「リゝー」

と云つて、鰈の一つを箸で高々と摘まみ上げる。リゝーは後脚で立ち上つて小判型のチャブ台の縁に前脚をかけ、皿の上の肴をじつと睨(にら)まへてゐる恰好は、バアのお客がカウンターに倚りかゝつてゐるやうでもあり、ノートルダムの怪獣のやうでもあるのだが、いよ／＼餌(えさ)が摘まみ上げられると、急に鼻をヒクヒクさせ、大きな、俐巧(りこう)さうな眼を、まるで人間がびつくりした時のやうにまるく開いて、下から見上げる。だが庄造はさう易(やすやす)々とは投げて

やらない。

「そうれ！」

と、鼻の先まで持つて行つてから、逆に自分の口の中へ入れる。

そして魚に滲みてゐる酢をスツパツパ吸ひ取つてやり、堅さうな骨は噛み碎いてやつてから、又もう一遍摘まみ上げて、遠くしたり、近くしたり、高くしたり、低くしたり、いろいろにして見せびらかす。それにつられてリヽーは前脚をチヤブ台から離し、幽靈の手のやうに胸の両側へ上げて、よちく歩き出しながら追ひかける。すると獲物をリヽーの頭の真上へ持つて行つて静止させるので、今度はそれに狙ひを定めて、一生懸命に飛び着かうとし、飛び着く拍子に素早く前脚で目的物を掴まうとするが、アハ

ヤと云ふ所で失敗しては又飛び上る。かうしてやうく一匹の鰯をせしめる迄に五分や十分はかかるのである。

此の同じことを庄造は何度も繰り返してゐるのだつた。一匹やつては一杯飲んで、

「リヽー」

と呼びながら次の一匹を摘まみ上げる。皿の上には約二寸程の長さの小鰯が十二三匹は載つてゐた筈だが、恐らく自分が満足に食べたのは三匹か四匹に過ぎまい、あとはスツパスツパ二杯酢の汁をしやぶるだけで、身はみんなくれてやつてしまふ。

「あ、あ、あ痛！ 痛いやないか、こら！」

やがて庄造は頓興な声を出した。リヽーがいきなり肩の上へ



飛び上つて、爪を立てたからなのである。

「こら！ 降り！ 降りんかいな！」

残暑もそろく衰へかけた九月の半ば過ぎだつたけれど、太つた人にはお定まりの、暑がりやで汗ツ^{あせ}搔^かきの庄造は、此の間の出水で泥だらけになつた裏の縁^{えん}鼻^{はな}ヘチヤブ台を持ち出して、半袖のシャツの上に毛糸の腹巻をし、麻の半股引^{はんももひき}を穿いた姿のまゝ胡坐^{ぐら}をかいてゐるのだが、その円々と膨らんだ、丘のやうな肩の肉の上へ飛び着いたリヽーは、つるく滑り落ちさうになるのを防ぐために、勢ひ爪を立てる。と、たつた一枚のちぢみのシャツを透して、爪が肉に喰^くひ込むので、

「あ痛！ 痛！」

と、悲鳴を挙げながら、

「えゝい、降りんかいな！」

と、肩を揺す振つたり一方へ傾けたりするけれども、さうすると
猶落なおちまいとして爪を立てるので、しまひにはシヤツにポタポタ
血がにじんで来る。でも庄造は、

「無茶しよる。」

とボヤキながらも決して腹は立てないのである。リヽーはそれを
すつかり呑み込んでゐるらしく、頬ほつぺたへ顔を擦りつけてお世辞
を使ひながら、彼が魚さかな_{ふく}を卿はたんだと見ると、自分の口を大胆に主人
の口の端はたへ持つて行く。そして庄造が口をもぐくさせながら、
舌で魚を押し出してやると、ヒヨイとそいつへ咬かみ着くのだが、

一度に喰ひちぎつて来ることもあれば、ちぎつたついでに主人の口の周りを嬉しさうに舐め廻すこともあり、主人と猫とが両端を咬くわへて引つ張り合つてゐることもある。その間庄造は「うツ」とか、「ペツ、ペツ」とか、「ま、待ちいな！」とか合あいの手を入れて、顔をしかめたり唾液つばきを吐いたりするけれども、実はリヽーと同じ程度に嬉しさうに見える。

「おい、どうしたんや？」

だが、やつとのことで一と休みした彼は、何気なく女房の方へ杯をさし出すと、途端に心配さうな上眼使うわめづかひをした。どうした訳か今しがたまで機嫌の好かつた女房が、酌をしようともしないで、両手を懷ふところに入れてしまつて、真正面からぐつと此方こちらを視詰みつめてゐ

る。

「そのお酒、もうないのんか？」

出した杯を引つ込めて、オツカナビツクリ眼の中を覗き込んだが、相手はたじろぐ様子もなく、

「ちよつと話があるねん。」

と、さう云つたきり、口惜しさうに黙りこくつた。

「なんや？　え、どんな話？」

「あんた、その猫品子さんに譲つたげなさい。」

「何でやねん？」

脣から棒に、そんな乱暴な話があるものかと、つゞけざまに眼を

パチクリさせたが、女房の方も負けず劣らず険悪な表情をしてゐ

るので、いよいよ分らなくなつてしまつた。

「何で又急に、……」

「何でゞも譲つたげなさい、明日塚本さん呼んで、早よ渡してしまひなさい。」

「いつたい、それ、どう云ふこツちやねん？」

「あんた、否やのん？」

「ま、まあ待ち！ 訳も云はんとさう云うたかて無理やないか。

何ぞお前、気に触つたことあるのんか。」

リヽーに対する焼餅やきもち？——と、一応思ひついてみたが、それ

も腑に落ちないと云ふのは、もとく自分も猫が好きだつた筈なのである。まだ庄造が前の女房の品子と暮してゐた時分、品子が

とき／＼＼猫のことで焼餅を焼く話を聞くと、福子は彼女の非常識を笑つて、嘲弄^{ちようろう}の種にしたものだつた。そのくらいだから、勿論庄造の猫好きを承知の上で來たのであるし、それから此方、庄造ほど極端ではないにしても、自分も彼と一緒になつてリヽ一を可愛がつてゐたのである。現にかうして、三度々々の食事には、夫婦さし向ひのチャブ台の間へ必ずリヽ一が割り込むのを、今迄兎や角云つたことは一度もなかつた。それどころか、いつでも今日のやうな風に、夕飯の時にはリヽ一とゆつくり戯れながら晩酌を楽しむのであるが、亭主と猫とが演出するサークルの曲藝にも似た珍風景を、福子とても面白さうに眺めてゐるばかりか、時には自分も餌を投げてやつたり飛び着かせたりするくらいで、リヽ

ーの介在することが、新婚の二人を一層仲よく結び着け、食卓の空気を明朗化する効能はあつても、邪魔になつてはゐない筈だつた。とすると一体、何が原因なのであらう。つい昨日まで、いや、ついさつき、晩酌を五六杯重ねるまでは何のこともなかつたのに、いつの間にか形勢が变つたのは、何かほんの些細なことが癪に触つたのでもあらうか。それとも「品子に譲つてやれ」と云ふのを見ると、急に彼女が可哀さうにでもなつたのか知らん。

さう云へば、品子が此處ここを出て行く時に、交換条件の一つとしてリーネを連れて行きたいと云ふ申し出でがあり、その後も塚本を仲に立てゝ、二三度その希望を伝へて来たことは事実である。だが庄造はそんな云ひ草は取り上げない方がよいと思つて、そのつ

ど断つてゐるのであつた。塚本の 口上こうじょうでは、連れ添ふ女房を追ひ出して余所よその女を引きずり込むやうな不実な男に、何の未練もないと云ひたいところだけれども、やつぱり今も庄造のことが忘れられない、恨んでやらう、憎んでやらうと努めながら、どうしてもそんな気になれない、ついては思ひ出の種になるやうな記念の品が欲しいのだが、それにはリヽ一ちゃんを此方へ寄越して貰へまいか、一緒に暮してゐた時分には、あんまり可愛がられてゐるのが忌まくいしくて、蔭でいちめたりしたけれども、今になつては、あの家の中にあつた物が皆なつかしく、分けてもりヽ一ちゃんが一番なつかしい、せめて自分は、リヽ一ちゃんを庄造の子供だと思つて精一杯可愛がつてやりたい、さうしたら辛い悲し

い氣持がいくらか慰められるであらう。——

「なあ、石井君、猫一匹ぐらゐ何だんね、そない云はれたら可哀さうやおまへんか。」

と、さう云ふのだつたが、

「あの女の云ふこと、眞に受けたらアキまへんで。」

と、いつも庄造はさう答へるに極きまつてゐた。あの女は兔角懸とかくかけひ引きが強くつて、底に底があるのだから、何を云ふやら眉唾物まゆつばものである。第一剛情ごうじょうで、負けず嫌ひの癖に、別れた男に未練があるの、リヽーが可愛くなつたのと、しをらしいことを云ふのが怪しい。あいつ彼奴が何でリヽーを可愛がるものか。きつと自分が連れで行つて、思ふさまいちめて、腹癒はらいせをする気なのだらう。さう

でなかつたら、庄造の好きな物を一つでも取り上げて、意地悪をしようと云ふのだらう。——いや、そんな子供じみた復讐心より、もつとく深い企みがあるのかも知れぬが、頭の単純な庄造には相手の腹が見透せないだけに、変に薄気味が悪くもあれば、反感も募るのだった。それでなくともあの女は、随分勝手な条件を沢山持ち出してゐるではないか。しかしもとく此方に無理があるのだし、一日も早く出て貰ひたいと思つたればこそ、大概なことは聞いてやつたのに、その上りヽ一まで連れて行かれて溜るものか。それで庄造は、いくら塚本が執拗しつづこく云つて來ても、彼一流の婉曲えんきょくな口実でやんはり逃げてゐるのであつたが、福子もそれに賛成なのは無論のことと、庄造以上に態度がハツキリし

てゐたのである。

「訳を云ひな！ 何のこツちや、僕さつぱり見当が付かん。」

さう云ふと庄造は、銚子を自分で引き寄せて、手酌で飲んだ。それから股をぴたツと叩いて、

「蚊遣線香あれへんのんか。」

と、ウロくそ辺を見廻しながら、半分ひとりごとのやうに云つた。あたりが薄暗くなつたので、つい鼻の先の板塀の裾から、蚊がワン／＼云つて縁側の方へ群がつて来る。少し食ひ過ぎたと云ふ恰好でチヤブ台の下にうづくまつてゐたりゝーは、自分のことが問題になり出した頃こそくと庭へ下りて、塀の下をくゞつて、何処かへ行つてしまつたのが、まるで遠慮でもしたやうで可お

笑かしがつたが、鱈たらふく御馳走になつた後では、いつでも一遍すうつと姿を消すのであつた。

福子は黙つて台所へ立つて行つて、渦巻の線香を搜して来ると、それに火をつけてチャブ台の下へ入れてやつた。そして、

「あんた、あの鰯、みんな猫に食べさせなはつたやろ？　自分が食べたのん二つか三つよりあれしまへんやろ？」

と、今度は調子を和らげて云ひ出した。

「そんなこと僕、覚えてエへん。」

「わてちちゃんと数へてゝん。そのお皿の上に最初十三匹あつてんけど、リヽーが十匹食べてしもて、あんたが食べたのん三匹やないか。」

「それが悪かつたのんかいな。」

「何で悪い云ふこと、分つてなはんのんか。なあ、よう考へて御覧。わて猫みたいなもん相手にして焼餅焼くのんと違ひまつせ。けど、鰯の二杯酔わけは嫌ひや云ふのんに、僕好きやよつてに拵へてほしい云ひなはつたやろ。そない云うといて、自分ちよつとも食べんとおいといてからに、猫にばつかり遣つてしまつて、……」

彼女の云ふのは、かうなのである。

阪神電車の沿線にある町々、西宮、蘆屋、魚崎、住吉あたりでは、地元の浜で獲れる鰯や鰯を、「鰯の取れ／＼」「鰯の取れ／＼」と呼びながら大概毎日売りに来る。「取れ／＼」とは

「取りたて」と云ふ義で、値段は一杯十錢から十五錢ぐらゐ、それで三四人の家族のお数かずになるところから、よく売れると思えて一日に何人も来ることがある。が、鰯も鰯も夏の間は長さいっすんぐらゐのもので、秋あき口ぐちになるほど追ひく寸が伸びるのであるが、小さいうちは塩焼にもフライにも都合が悪いので、素焼きにして二杯酢に漬け、※義しょうがを刻んだのをかけて、骨ごと食べるより仕方がない。ところが福子は、その二杯酢が嫌ひだと云つて此の間から反対してゐた。彼女はもつと温かい脂あぶらツツこいものが好きなので、こんな冷めたいモソモソしたものを食べさせられては悲しくなると、彼女らしい贅沢ぜいたくを云ふと、庄造は又、お前はお前で好きなものを拵へたらよい、僕は小鰯が食べたいから自分で料理

すると云つて、「取れ！」が通ると勝手に呼び込んで買ふのである。福子は庄造と従兄弟同士で、嫁に来た事情が事情だから、姑には気がねが要らなかつたし、來た明くる日から我わが儘まま一杯に振舞つてゐたけれど、まさか亭主が庖丁ほうちょうを持つのを見てゐる訳に行かないから、結局自分がその二杯酔を拵へて、いやくながら一緒にたべることになつてしまふ。おまけにそれが、もう此処のところ五六日も続いてゐるのであるが、二三日前にふと気が付いたこと、云ふのは、女房の不平を犯してまで食膳に上のぼせる程のものを、庄造は自分で食べることか、リヽーにばかり与へてゐる。それでだんく考へて見たら、成る程ほどあの鰯は姿が小さくて、骨が柔かで、身をむしつてやる面倒がなくて、値段のわりに

数がある、それに冷めたい料理であるから、毎晩あんな風にして猫に食はせるには最も適してゐる訳で、つまり庄造が好きだと云ふのは、猫が好きだと云ふことなのである。此処の家では、亭主が女房の好き嫌ひを無視して、猫を中心に晩のお数をきめてゐたのだ。そして亭主のためと思つて辛抱してゐた女房は、その実猫のために料理を拵へ、猫のお附き合ひをさせられてゐたのだ。

「そんなことあれへん、僕、いつかて自分が食べよう思うて頼むねんけど、リヽーの奴があないに執拗ひつこう欲しがるさかいに、ついウカツとして、後からく投げてまうねんが。」

「謔うそ云ひなさい、あんた始めからリヽーに食べさせう思うて、好きでもないもん好きや云うてるねんやろ。あんた、わてより猫が

大事やねんなあ。」

「ま、ようそんのこと。……」

仰山に、吐き出すやうにさう云つたけれど、今の一言ですつかり萎れた形だつた。

「そんなら、わての方が大事やのん？」

「きまつてるやないか！ 阿呆らしなつて来るわ、ほんまに！」

「口でばつかりそない云はんと、証拠見せて工な。そやないと、あんたみたいなもん信用せエへん。」

「もう明日から鯉買ふのん止めにせう。な、そしたら文句ないねんやろ。」

「それより何より、リヽ一遣^やつてしまひなはれ。あの猫ゐんやう

になつたら一番えゝねん。」

まさか本氣で云ふのではないだらうけれど、タ力を括り過ぎて依怙地になられては厄介なので、是非なく庄造は膝ひざがしら頭かしらを揃へ、キチンと畏かしこまつてすわり直すと、前まえかが屈みに、その膝の上へ両手をつきながら、

「さうかてお前、虐められること分つて、あんな所へやれるかいな。そんな無慈悲なこと云ふもんやないで。」

と、哀れツぼく持ちかけて、嘆願するやうな声を出した。

「なあ、頼むさかいに、そない云はんと、……」

「ほれ御覽、やつぱり猫の方が大事なんやないかいな。リヽードないぞしてくれへなんだら、わて去なして貰ひまつさ。」

「無茶云ひな！」

「わて、畜生と一緒にされるのん嫌ですよつてにな。」

あんまりムキになつたせゐか、急に涙が込み上げて来たのが、自分にも不意討ちだつたらしく、福子は慌てゝ亭主の方へ背中を向けた。

雪子の名を使つた品子のあの手紙が届いた朝、最初に彼女が感じたのは、こんないたづらをして私達の間へ水を挿さうとするなんて、何と云ふ嫌な人だらう、誰がその手に乗つてやるもんか、と云ふことだつた。品子の腹は、かう云ふ風に書いてやつたら、結局福子はりゝーのゐることが心配になつて、此方へ寄越すかも知

れない、さうなつたら、それ見たことか、人を笑つたお前さんも
 猫に焼餅を焼くぢやないか、やつぱりお前さんだつてさう御亭主
 に大事にされてもゐないのだねえと、手を叩いて嘲あざけつてやらう、
 そこまで巧く行かないとしても、此の手紙をキツカケに家庭に風
 波が起るとしたら、それだけでも面白いと、さう思つてゐるに違
 ひないので、その鼻を明かしてやるのには、いよく夫婦が仲好
 く暮すやうにして、こんな手紙などてんで問題にならなかつたと
 云ふ所を見せてやり、二人が同じやうにリヽーを可愛がつて、と
 もう手放す氣がないことをもつとハツキリ知らしてやる、――
 もうそれに越したことはないのであつた。

だが、生憎あいにくなことに此の手紙の来た時期が悪かつた。と云ふの

は、ちやうど此の二三日小鱈の二杯酢の一件が福子の胸につかへてゐて、一遍亭主を取つちめてやらうと考へてゐた矢先だつたのである。一体、彼女は庄造が思つてゐるほど猫好きではないのだが、庄造の気持を迎へるためと、品子への面当つらあてと、両方の必要から自然猫好きになつてしまひ、自分もさう思へば人にも思はせてゐたのであつて、それは彼女がまだ此の家へ乗り込まない時分、蔭で姑のおりんなどとグルになつて専ら品子の追ひ出し策にかつてゐる間のことだつた。そんな次第で、此処へ来てからもりゝーを可愛がつてやつて、精々せいぜい猫好きで通してゐたのだが、だんく彼女はその一匹の小さい獸の存在を、呪はしく思ふやうになつた。何でも此の猫は西洋種だと云ふことだつたが、以前、此処

へお客様で遊びに来て膝の上などへ乗せてやると、手触りの工合が柔かで、毛なみと云ひ、顔だちと云ひ、姿と云ひ、ちよつと此の辺には見当らない綺麗な雌猫であつたから、その時はほんたうに愛らしいと思ひ、こんなものを邪魔にするとは品子さんと云ふ人も変つてゐる、やつぱり亭主に嫌はれると、猫にまで僻みを持つのか知らんと、面当てゞなくさう感じたものだつたけれど、今度自分が後あとが金かなへ直つてみると、自分は品子と同じ扱ひを受ける訳でもなく、大切にされてゐることは分つてゐながら、どうも品子を笑へない気持になつて來るのが不思議であつた。それと云ふのは、庄造の猫好きが普通の猫好きの類たぐいではなくて、度を越えてゐるせるなのである。實際、可愛がるものいゝけれども、一匹の魚

を（而も女房の見てゐる前で！）口移しにして、引張り合つたりするなどは、あまり遠慮がなきすぎる。それから晩の御飯の時に割り込んで来られることも、正直のところは愉快でなかつた。夜は姑が氣を利かして、自分だけ先に食事を済まして二階へ上つてくれるのだから、福子にしてみればゆつくり水入らずを楽しみたいのに、そこへ猫奴が這入つて来て亭主を横取りしてしまふ。好いあんばいに今夜は姿が見えないなと思ふと、チヤブ台の脚を開く音、皿小鉢の力チヤンと云ふ音を聞いたら直ぐ何処から帰つて来る。たまに帰らないことがあると、怪しきらるのは庄造で、「リヽー」「リヽー」と大きな声で呼ぶ。帰つて来る迄は何度でも、二階へ上つたり、裏口へ廻つたり、往来へ出たりして呼び立

てる。今に帰るだらうから一杯飲んでいらつしやいと、彼女がお銚子を取り上げても、モヂくしてゐて落ち着いてくれない。さう云ふ場合、彼の頭はリヽ一のことで一杯になつてゐて、女房がどう思ふかなどと、ちよつとも考へてみないらしい。それにもう一つ愉快でないのは、寝る時にも割り込んで来ることである。庄造は今迄猫を三匹飼つたが、蚊帳かやをくゞることを知つてゐるのはリヽ一だけだ、全くりヽ一は俐巧だと云ふ。成る程、見てみるとぴつたり頭たたみ^すを畳たたみへ擦り付けて、するくすそと裾すそをくゞり抜けて這入る。そして大概は庄造の布団の側で眠ねむるけれども、寒くなれば布団の上へ乗るやうになり、しまひには枕の方から、蚊帳をくゞるのと同じ要領で夜具の隙間へもぐり込んで来ると云ふ。そんな風

だから、此の猫にだけは夫婦の秘密を見られてしまつてゐるのである。

それでも彼女は、今更猫好きの看板を外して嫌ひになり出すキツ力ヶがないのと、「相手はたかが猫だから」と云ふ己惚れに引き擦られて、腹の虫を押さへて來たのであつた。あの人はリヽーを

おもちゃ 玩具にしてゐるだけなので、ほんたうは私が好きなのである、

あの人に取つて天にも地にも懸け換へのないのは私なのだから、

変な工合に氣を廻したら、自分で自分を安っぽくする道理である。もつと心を大きく持つて、何の罪もない動物を憎むことなんか止めにしようど、さう云ふ風に氣を向けかへて、亭主の趣味に歩調を合はせてゐたのだが、もとく こらしおう 悅へ性のない彼女にそんな我慢

が長づゞきする筈がなく、少しづゝ不愉快さが増して来て顔に出来ゝつてゐたところへ、降つて湧いたのが今度の二杯酢の一件だつた。亭主が猫を喜ばすために、女房の嫌ひなものを食膳に上せる、而も自分が好きなふりをして、女房の手前を繕つてまでも！——これは明かに、猫と女房とを天秤にかけると猫の方が重い、と云ふことになる。彼女は見ないやうにしてゐた事実をまざくと鼻先へ突き付けられて、最早やはや己惚れの存する余地がなくなつてしまつた。

ありていに云ふと、そこへ品子の手紙が舞ひ込んで来たことは、彼女の焼餅を一層煽あおつたやうでもあるが、一面には又、それを爆発の一歩手前で抑制すると云ふ働きをした。品子さへおとなしく

してゐたら、リバーの介在をもう一日も黙視出来なくなつた彼女は、早速亭主に談判して品子の方へ引き渡せる積りでゐたのに、あんないたづらをされてみると、素直に註文を聴いてやるのが忌ましくしい。つまり亭主への反感と、品子への反感と、孰方の感情で動いたらよいか板挟みになつてしまつたのである。手紙の來たことを亭主に打ち明けて相談すれば、事実はさうでないにも拘はらず品子にケシカケられたやうな形になるのが心外であるから、それは内証にして置いて、孰方が余計憎らしいかと考へると、品子の遣り方やも腹が立つけれども、亭主の仕打ちも堪かんにん忍ごんがならない。殊に此の方は毎日眼の前で見てゐるのだから、どうにもムシヤクシヤする訳だし、それに、本当のこと云ふと、「用心しな

いと貴女も猫に見換へられる」と書いてあつたのが、案外ぐんと胸にこたへた。まさかそんな馬鹿げたことがとは思ふけれども、リーハーを家庭から追ひ払つてしまひさへすれば、イヤな心配をしないでも済む。たゞさうすると品子に溜飲りゅういんを下げさせることになるのが、いかにも残念でたまらないので、その方の意地が昂じて来ると、猫のことぐらゐ辛抱しても誰があの女の計略なんぞにと、云ふ風になる。——で、今日の夕方チヤブ台の前にすわる迄は、彼女はさう云ふグル／＼廻りの状態に置かれて懊れてゐたのだが、皿の上の鰯が減つて行くのを数へながらいつものいちやつき眺めてゐると、ついかあツとして亭主の方へ鬱憤うつぶんを破裂させしまつたのである。

しかし最初は嫌がらせにさう云つた迄で、本気でリヽーを追ひ出
 す積りはなかつたらしいのであるが、へんに問題をコジレさせて
 退つ引きならないやうにしたのは、庄造の態度が大いに原因して
 ゐるのである。庄造としては、福子が腹を立てたのは至極尤もな
 のであるから、イザコザなしに、あつさり彼女の希望を入れて納な
 得とくしてしまへば一番よかつた。さうして意地を通してさへやつ
 たら、却つて後は機嫌が直つて、それには及ばぬと云ふことにな
 つたかも知れないのに、道理のないところへ道理をつけて、逃げ
 を打つた。これは庄造の悪い癖なので、イヤならイヤときつぱり
 云つてしまふならいゝのだが、なるたけ相手を怒らせないやうに、
 追ひ詰められるまでは瓢箪鮓ひょうたんなますに受け流してゐて、土壇場どたんばへ

来るとヒヨイと寝返る。もう少しで承知しさうな口ぶりを見せて、その実決して「うん」と云はない。気が弱さうで、案外ネチネチした狡い人だと云ふ印象を与へる。福子は亭主が、外のことなら彼女の我が儘を通すくせに、此の問題に関する限り、「たかが猫なんぞ」と何でもなさうに云ひながら、中々同意しないのを見ると、リヽーに対する愛着が想像以上に深いものとしか思へないので、いよく捨てゝ置けない気がした。

「ちよつと、あんた！……」

その晩彼女は、蚊帳の中に這入つてから又始めた。

「ちよつと、此こつち方向きなさい。」

「あゝ、僕眠たい、もう寝さして。……」

「あかん、さつきの話きめてしまはなんだら、寝させへん。」

「今夜に限つたことあるかいな、明日にして。」

表は四枚の硝子戸ガラスどにカーテンを引いてあるだけなので、軒燈けんとうのあかりがぼんやり店の奥へ洩れて来て、もやくと物が見える中で、庄造は掛け布団ははをすつかり剥いで仰向きに臥てゐたが、さう云ふと女房の方へ背中を向けた。

「あんた、そつち向いたらあかん！」

「頼むさかいに寝さして工な、ゆうべ僕、蚊帳アシタカん中に蚊ア這入つて、ちよつとも寝られへなんでん。」

「そしたら、わての云ふ通りしなはるか。早う寝たいなら、それきめなさい。」

「殺^{せつしょう}生^なやなあ、何をきめるねん。」

「そんな、寝惚^{ねぼ}けたふりしたかて、胡麻化^{ごまか}されまつかいな。リヽ一遣^やんなはるのんか孰方^{どっち}だす？ 今はつきり云うて頂戴^{もら}。」

「明日、――明日まで考へさして貰^{もら}を。」

さう云つてゐるうちに、早くも心地よさゝうな寝息を立てたが、

「ちよつと！」

と云ふと、福子はムツクリ起き上つて亭主の側にすわり直すと、いやと云ふ程臀^{しり}の肉を抓^{つね}つた。

「痛い！ 何をするねん！」

「あんた、いつかてりヽーに引つ搔かれて、生傷^{なまきず}絶やしたことないのんに、わてが抓つたら痛いのんか。」

「痛！　えゝい、止めんかいな！」

「此れぐらゐ何だんね、猫に搔かすぐらゐやつたら、わてかて体ぢゆう引つ搔いたるわ！」

「痛、痛、痛、……」

庄造は、自分も急に起き直つて防禦ぼうぎよの姿勢を取りながら、続けざまに叫んだ。二階の年寄に聞かせたくないので、大きな声は立てなかつたが、抓るかと思ふと今度は引つ搔く。顔、肩、胸、腕、腿、所嫌はず攻めてるので、慌てゝ避ける度たびごと毎にバタン！と云ふ地響きが家ぢゆうへ伝はる。

「どないや？」

「もう堪忍、…………堪忍！」

「眼工覚めなはつたか？」

「覚めいでかいな！ あゝ痛、ヒリ／＼するわ。……」

「そしたら、今のこと返事しなさい、孰方どつちだす？」

「あゝ痛、……」

それには答へないで、顔をしかめながら方々をさすつてみると、
「又だつか、胡麻化ごまかしたら此れだつせ！」

と、二三本の指でモロに頬つぺたをがりツと行かれたのが、飛び
上るほど痛かつたらしく、思はず、

「いたア——」

と泣き声を出したが、途端にリヽ一までがびつくりして、蚊帳の
外へ逃げ出して行つた。

「僕、何でこんな目に遭はんならん。」

「ふん、リヽ一のためや思うたら、本望だつしやろが。」

「そんな阿呆らしいこと、まだ云うてるのんか。」

「あんたがはつきりせんうちは、何ぼでも云ひまつせ。
あ、わてを去^いなすかりヽ一遣^やんなはるか、孰方だす?」

「誰がお前を去なす云うた?」

「そんならリヽ一遣んなはるのんか?」

「そない孰方かにきめんならんこと……」

「あかん、きめて欲しいねん。」

さう云ふと福子は、胸^{むなぐら}倉^{くら}を取つて小突き始めた。

「さあ孰方や、返事しなさい、早う! 早う!」

「何とまあ手荒な、……」

「今夜はどないなことしたかて 堪忍かんにんせ工しまへんで。さあ、早う！ 早う！」

「えゝ、もう、シヨウがない、リゝー遣つてしまへるわ。」

「ほんまだつかいな。」

「ほんまや。」

庄造は眼をつぶつて、観念の臍ほぞを固めたと云ふ顔つきをした。

「——その代り、あと一週間待つてくれへんか。なあ、こないに云うたら又怒られるか知れへんけど、なんぼ畜生にしたかて、此処の家に十年もいてたもん、今日云うて今日追ひ出す訳に行くかいな。そやさかいに、心残りのないやうにせめてもう一週間置

いてやつて、たんと好きなもん食べさして、出来るだけのことしてやりたいねん。なあ、どないや？ お前かてその間ぐらゐ機嫌直して可愛がつてやりいな。猫は執念深いよつてにな。」

いかにも懸引かけひきのない真情らしく、さうしんみりと訴へられてみると、それには反対が出来なかつた。

「そしたら一週間だつせ。」

「分つてる。」

「手工出しなさい。」

「何や？」

と云つてゐる隙に、素早く指切りをさせられてしまつた。

「お母さん

それから二三日過ぎた夕方、福子が銭湯へ出かけた留守に、店番をしてゐた庄造は奥の間へ声をかけながら這入つて来ると、自分だけの小さなお膳で食事してゐる母親の側へ、モヂ／＼しながら中腰にかゞんだ。

「お母さん、ちよつと頼みがありまんねん。——」

毎朝別に炊いてゐる土鍋の御飯の、お粥のやうに柔かいのがすつかり冷えてしまつたのを茶碗に盛つて、塩昆布を載せて食べてゐる母親は、お膳の上へ背を円々と蔽ひかぶさるやうにしてゐた。

「あのなあ、福子が急にリヽ一嫌ひや云ひ出してなあ、品子んとこへ遣つてしまへ云ひまんね。……」

「此のあひだ、えらい騒ぎしてたやないか。」

「お母さん知つてなはつたんか。」

「夜中にあんな音さすよつて、わてびつくりして、地震か思うた
わ。あれ、そのことでかいな?」

「さうだんが。これ見て御覧、——」

と、庄造は両腕を突き出して、シャツの袖をまくり上げた。

「これ、そこらぢゆう 蚊みみづばれ 脹あざ や痣あざ だらけだ。顔にかけて此れ、ま
だ痕あと 残つてるやろ。」

「何でそんなことしられたんや?」

「焼餅だんが。——阿呆らしい、猫可愛がり過ぎる云うて焼餅

やくもん、何処の国にあるか知らん、気違ひ沙汰や。」

「品子かてよう何の彼かんの云うてたやないか。お前みたいに可愛がつたら、誰にしたかて焼餅ぐらゐ起すわいな。」

「ふうん、——」

幼い時から母親に甘える癖がついてゐるのが、此の歳になつてもまだ抜け切れない庄造は、だゞツ兒このやうに鼻の孔あなを膨ふくらがして、さも面白くなさゝうに云つた。

「——お母さん福子のこと云うたら、味方ばつかりするねんなあ。」

「けどお前、猫であらうと人間であらうと、外のもん可愛がつてゝ、來たばかりの嫁のこと思うてやらなんだら、氣イ悪うするのん当り前やで。」

「そら可笑おかしい。僕、いつかて福子のこと思うてまんが。一番大事にしてまんが。」

「さうに違ひないのんやつたら、ちよつとぐらゐの無理聴いてやりいな。わてあの娘こからもその話聞かされてるねんが。」

「それ、いつのことだんね？」

「昨日そない云うてなあ、——りゝ一いてたらよう辛抱せんさかい、五六日うちに品子の方へ渡すことに、もうちやんと約束したある云ふねんけど、ほんまかいな。」

「それや。——したことはしたけど、そんな約束実行せんかて済むやうに、何とかそこんとこ、あんぢよう云うて貰へんやろか。僕お母さんにそれ頼まう思うてゝん。」

「さうかて、約束通りしてくれなんだら、去なして貰ふ云うてる
ねんで。」

「威嚇おどかしや、そんなこと。」

「威嚇しかも知れんけど、そないまでに云ふもん聴いてやつたら
どないや？ 又うるさいで、約束違たがへたら。——」

庄造は酸すっぱいやうな顔をして、口を尖とがらせて俯向うつむいてしまつた。
母から云はせて福子を宥なだめる目算もくさんでゐたのが、すつかり外れて
しまつたのである。

「あの娘あんな気象やよつてに、ほんまに逃げて行くかも知れん。
それもえゝけど、嫁を放つといて猫可愛こわいがるやうなとこへ内の娘むすめ
遣やつとけん！ 云はれたらどないする？ お前よりわてが困るわ

いな。」

「そしたら、お母さんもリヽ一追ひ出してしまへ云やはりまんの
んか。」

「そやさかいにな、兎に角こゝのとこはあの娘の氣持済むやうに、
一遍すうツと品子の方へ遣つてしまひイな。そないしといて、えゝ
折を見て、機嫌直つた時分に取り戻すこと出来んもんかいな。」

――

そんな、渡してしまつたものを先方が返す筈もなし、受け取る筋
でもないことは分つてゐながら、庄造が母親に甘えるやうに、母
親も見え透いた氣休めを云つて、子供を賺すつかうな風に庄造をあ
やなす癖があつた。そして彼女は、いつでも結局此の忤せがれを自分の

思ひ通りに動かしてゐるのだつた。

もう若い者はセルを着出した頃だのに、あわせ捨の上に薄綿の這入つたジンベ工を着て、メリヤスの足袋たびを穿いてゐる彼女は、小柄で、瘦せてゐて、生活力の衰へきつた老婆のやうに見えるけれども、頭の働きは案外確かで、云ふことやすることにソツがないので、「息子よりも婆さんの方がしつかりしてゐる」と、近所ではさう云ふ評判だつた。品子が追ひ出されたのも、実は彼女が糸を操つあやつたからなので、庄造にはまだ未練があつたのだと云ふ人もある。それやこれやで、此の附近では母親を憎む者が多く、一般の同情は品子の方に集まつてゐたが、彼女に云はせると、いくら姑の気に入らない嫁でも、悻が好きなものならば、出る筈もないし出せ

る訳もない、やつぱりあれは庄造に飽かれたからだと云ふ。なるほどそれもさうだけれども、彼女と福子の父親が手を貸さなければ、庄造一人での女房をいびり出す勇気はなかつたと云ふのが、間違ひのない事実であつた。

いつたい母親と品子とは、どう云ふものか初めから反りが合はなかつた。勝氣な品子は、落ちどを拾はれないやうに気を附けて、随分姑には勤めてゐたけれども、さう云ふ風に抜け目なく立ち廻つて行かれることが、又母親の癪しゃく_{さわ}に触つた。うちの嫁は何処と云つて悪いところはないやうなものゝ、何だか親身しんみに世話をして貰ふ気になれない、それと云ふのが、心から年寄いたを勞はつてやらうと云ふ優しい情愛がないからなのだと、母親はよくさう云つたが、

つまり嫁も姑も、孰方どちらもしつかり者だつたのが不和の原因になつたのである。それでも一年半ばかりの間は、表面だけは無事に治まつてゐたのだつたが、その時分から母親のおりんは嫁が面白くないと云つて、始終今津いまづの兄の所、庄造には伯父に当る中島の家へ泊まりに行つて、二日も三日も帰つて来ないやうになつた。あまり逗とうりゅう留ゆうが長いので、品子が様子を見に行くと、お前は帰つて庄造を迎ひに寄越せと云ふ。庄造が行くと、伯父や福子までが一緒になつて引き止めて、晩になつても帰してくれない。それには何か魂胆こんたんがあるらしいことは、庄造もうすく気が付いてゐながら、甲子園の野球だの、海水浴だの、阪神パークだと、福子に誘はれるまゝに、何処へでもふらーと喰つ着いて行つて、

呑氣のんきに遊んでゐるうちに、とうく彼女と妙な仲になつてしまつた。

此の伯父と云ふのは菓子の製造販売をしてゐて、今津の町に小さな工場を持つてゐたばかりでなく、国道沿線に五六軒の家作かさくを建てたりして裕福に暮らしてゐたのだつたが、福子のことでは大分今迄に手を焼いてゐた。母親が早く亡くなつたせゐもあるのだが、女学校を二年の途中で止めさせられたか、勝手に止めてしまうが、女学校を二年の途中で止めさせられたか、勝手に止めてしまつたかしてから、さつぱり尻が落ち着かない。家出をしたことも二度ぐらゐあつて、神戸の新聞に素ツ葉抜かれたりしたものだから、縁付けようと思つても中々貰ひ手がなかつたし、自分も窮屈な家庭などへは行きたくない。そんなこんなで、何とか早く身

を固めさせなければ、父親が焦つてゐる事情に眼を付けたのが
 おりんであつた。福子は自分の娘のやうなもので、気心はよく分
 つてゐるから、アラがあることは差支へない、品行の悪いの
 は困るけれども、もうそろく分別が出てもいゝ歳だから、亭主
 を持つたらまさか浮氣をすることもあるまい、それにそんなこと
 は大した問題でないと云ふのは、此の娘にはあの国道の家作が二
 軒附いてゐて、そこから上の家賃が六十三円になる。おりんの計
 算だと、父親がそれを福子の名義に直したのが二年も前のことだ
 あるから、その積立が元金だけでも一千五百十二円ある、それだ
 けのものは持参金として持つて来る上に、月々今の六十三円が這
 入るとすると、それらを銀行へ預けておいたら、十年もすれば一ひ

と財産出来るので、これが何よりの附けめであつた。

もつと

尤も彼女は老い先の短かい体であるから慾張つたところで仕方がないが、甲斐性のない庄造が此の先どうして凌いで行くつもりか、それを考へると安心して死んで行けないのであつた。何しろ蘆屋の旧国道は、阪急の方が開けたり新国道が出来たりしてから、年々さびれつゝあるので、こんなところでいつ迄荒物屋渡せい世をしてゐても思はしい訳はないのだけれど、動くには此の店を売り退かなければならぬし、さて売り退いても何処で何を始めようと云ふ成算がない。庄造はそんなことについてひどく呑気に生れついた男で、貧乏を苦にしない代りには、一向商売に身を入れない。十三四の頃、夜学へ通ひながら西宮の銀行の給仕に使は

れ、青木のゴルフ練習場のキヤディーにも雇はれ、年頃になつてからはコツクの見習を勤めたりしたけれど、何処も長つゞきがないで怠けてゐるうちに父親が亡くなつて、それから此方荒物屋の亭主で納まつてしまつた。ぜんたい店の商売などは母親に任して置いて、兎に角男一匹が何かしら職を求めたらよいのに、国道筋でカフエ工を始めたいからと伯父に出資を申し込んで、意見されたことがあつた外には、猫を可愛がることゝ、球たまを撞くことゝ、盆栽ぼんさいをいぢくることゝ、安カフエ工の女をからかひに行くことぐらゐより、何の仕事も思ひ付かない。さうして今から足かけ四年前、二十六の歳に畠屋の塚本を仲人に立てゝ、山蘆屋の或る邸に奉公してゐた品子を嫁に貰つたのだが、その時分から商売の方

がいよく上つたりになつて、毎月の遣り繰りに骨が折れて來た。親の代から蘆屋に住んでゐるお蔭で、長年ながねんの顔があるところから、暫くしばらは無理きが利いたけれども、坪つぼ十五錢の地代が二年近くも滞つて、百二三十円にもなつてゐるのは、どうにも返済の見込みが立たない。で、もう庄造をアテにしないことにきめた品子は、仕立物などを頼まれたりして暮らしの補ひをつけてゐたばかりか、折角お給金を溜めて一通り拵へて來た荷物にさへ手をつけて、僅かの間に減らしてしまつた。そんな訳だから、今更その嫁を追ひ出さうと云ふのは無慈悲な話で、近所の同情が彼女の方へ集まつたのも当然であるが、おりんにしてみれば、背に腹は換へられなかつたし、子種こだねのないと云ふことが難癖をつけるのに都合が好か

つた。それに福子の父親迄が、さうすれば娘の身が固まるし、甥おいの一家を救つてもやれるし、双方のためだと考へたのが、おりんの工作に油を注ぐ結果となつた。

それ故ゆえ福子が庄造と出来てしまつたのには、父親やおりんの取り持ちがあつたに違ひないのであるが、一体そんなことがなくとも、庄造は割りに誰にでも好かれるたちであつた。別に美男子なのではないが、幾つになつても子供っぽいところがあつて、氣だてが優しいせゐかも知れない。キヤディーの時代にはゴルフ場へ来る紳士や夫人たちに可愛がられて、盆ぼんくれ暮の附け届を誰よりも余計貰つたし、カフエ工などでも案外持てるので、僅かなお金で長く遊んで来ることを覚えてしまひ、そんなところからのらくらの癖

がついたのだつた。が、何にしてもおりんから云へば、自分がいろく細工をしてやつと我が家へ迎へ入れる迄に漕ぎ付けた、持参金附きの嫁御寮よめごりょうであるから、尻の軽い彼女に逃げられないやうに、恵と二人で精々機嫌を取らなければならない訳で、猫のことなどは勿論始めから問題でなかつた。いや、実を云ふと、おりんも内々猫には閉口してゐたのであつた。元来リヽーと云ふ猫は、神戸の洋食屋に住み込んでゐた庄造が帰つて来る時に連れて來たのだが、これがゐるために家の中が汚れること夥おびただしい。庄造に云はせると、此の猫は決して粗そそをしない、用をする時は必ずフンシへ這入ると云ふ。いかにもその点は感心だけれど、戸外にゐてもわざ／＼フンシへ這入るために戻つて來ると云ふ調子なので、

フンシが非常に臭くなつて、その悪臭が家中に充満するのである。おまけに臀の端へ砂を着けたまゝ歩き廻るので、畳がいつもザラ／＼になる。雨の日などは臭が一層強く籠つてむツとするところへ持つて来て、おもてのぬかるみを歩いたまゝで上つて来るから、猫の脚あとが此處彼處に点々とする。庄造は又、此の猫は戸でも襖ふすまでも障子でも、引き戸でさへあれば人間と同じに開ける、こんな賢いのは珍しいと云ふ。だが畜生の浅ましさには、開けるばかりで締めることを知らないから、寒い時分には通つたあとを一々締めて廻らなければならない。それもいゝけれども、そのためには障子は穴だらけ、襖や板戸は爪の痕だらけになる。それから困るのは、生物なまもの、煮物、焼物の類をうつかりその辺へ置くことが出

来ない、ぼんやりしてゐると直ぐ食べられてしまふので、お膳立てをするほんの僅かな間でも、水屋か蠅帳はいちょうへ一応入れて置かなければならぬ。いや／＼、もつとひどいことは、此の猫は臀の始末はよいが、口の始末が悪くて、とき／＼嘔吐するのである。それと云ふのは、庄造が例の曲藝に熱中して幾らでも餌を投げてやるので、つい食ひ過ぎるせゐなのであるが、晩飯の後でチヤブ台を除けると、その辺に一杯毛が落ちてゐて、食ひかけの魚の頭だの尻尾だのがたくさん散らばつてゐるのである。

品子が嫁に来る迄は、台所の世話や拭き掃除は一切おりんの役だつたから、リヽーのためには随分泣かされてゐる訳なのだが、今日まで我慢してゐたのは一つの出来事があつたからだつた。と云

ふのは、たしか五六年前に、無理に庄造を説き付けて、一度此の猫を尼ヶ崎の八百屋へ遣つたことがあつたが、やがて一ヶ月もした時分に、或る日ヒヨツコリ蘆屋の家へ独りで帰つて来たのである。犬なら不思議はないけれども、猫が前の主人を慕つて五六里の道を戻つて来るとは、あまりイデラシイ話なので、それ以来庄造の可愛がりやうは旧に倍したのみならず、おりんも流石に不憫を感じたのか、或は多少薄氣味悪く思つたのか、もうそれからは何も云はないやうになつた。そして品子が来てからは、福子と同じ理由から、——と云ふのは嫁をいちめるために、却つてリバーの存在が便利を与へがあるので、やさしい言葉の一つぐらゐは時々かけてやつてゐたのである。だから庄造は、その母親

までが突然福子の味方をし出した様子を見ては、心外でたまらないのであつた。

「けど、リヽ一やつたら遣つたかて又戻つて来まつせ。なんせ尼ヶ崎からでも戻つて来る猫やさかいにや。」

「ほんになあ、今度はまるきり知らん人やあれへんよつて、そこは何とも分らんけど、戻つて来たら又置いてやつたらえゝがな。ま、兎も角も遣つてみてみいな。——」

「あゝ、どうしよう、困つたなあ。」

庄造は頻りに溜息をついて、まだ何かしら粘つてみようとしてゐたが、その時おもてに足音がして、福子が風呂から帰つて來た。

「塙本君、分つてまんなんあ？ これ、なるべくそつと持つて行かんと、乱暴に振つたらあきまへんで。猫かて乗物に酔ふさかいになあ。」

「そない何遍も云はんかて、分つてまんが。」

「それから、此れや、」

と、新聞紙にくるんだ、小さな平べつたい包みを出して、

「実はなあ、いよくこれがお別れやさかいに、出がけに何ぞおいしいもん食べさしてやりたい思ひまんねんけど、乗物に乗る前に物食べさしたら、えらい苦しみまんねん。それでなあ、此の猫鶏の肉かしわが好きやよつてに、僕、自分でこれこ買うて来て、水煮みずだきにしどきましたさかい、彼方あつちへ着いたら直じき食べさしてやるやうに

云うとくなはれしまへんか。」

「よろしおます。あんぢよう持つて行きますよつて安心しなはれ。

——そんなら、もう用事おまへんか。」

「ま、ちよつと待つとくなはれ。」

さう云ふと庄造は、バスケットの蓋を開けて、もう一度しつかり抱き上げて、

「リヽー」

と云ひながら頬擦りをした。

「お前な、彼方へ行つたらよう云ふこと聴くんやで。彼方のあの人、もう先せんみみたいにいちめたりせんと、大事にして可愛がつてくれるさかいに、ちよつとも恐いことないで。えゝか、分つたなあ。

抱かれることが嫌ひなり、一は、あまり強く締められたので脚をバタ／＼やらしたが、バスケットの中へ戻されると、二三度周囲を突ツついてみたゞけで、とても出られないとあきらめたらしく、急に静まり返つてしまつたのが、ひとしほ哀れをそゝるのであつた。

庄造は、国道のバスの停留所まで送つて行きたかつたのであるが、今日から当分の間、風呂へ行く以外は一歩も外出してはならぬと、女房から堅く止められてゐるので、バスケットを提げた塚本が出て行つたあと、氣抜けがしたやうにぽつねんと店にすわつてゐた。福子が外出を禁じた訳は、リヽ一の様子を気遣ふ余りついふら／＼

＼と品子の家の近所ぐらゐまで行くかも知れないからであつたが、事実庄造自身にも、さう云ふ懸念がないことはなかつた。そして此の迂闊^{うかつ}な夫婦は、猫を渡してしまつてから、始めて品子のほんたうの腹が分りかけて來たのである。

成る程、リヽーを^{おとりおれ}囮に己^{おれ}を呼び寄せようと云ふ氣だつたのか。あの家の近所をうろくしたら、掴^{つか}まへて口説き落さうとでも云ふのか。——庄造はそこへ気がついてみると、いよいよ品子の陰険さ加減が憎くなつたが、そんな道具に使はれるリヽーの身の上に、一層可哀さが増して來た。唯一の望みは、尼ヶ崎から逃げて帰つて來たやうに、阪急の六甲^{ろっこう}にある品子の家から逃げて來はせぬかと云ふことであつた。実は水害の後の仕事で忙しい塚本が、

夜受け取りに来ると云つたのを、朝にして貰つたのも、明るい時に連れて行かれたら道を覚えてゐるであらう、さうしたら逃げて来るのも容易であらうと、そんな心積りがあつたからだが、それにつけても思ひ出されるのは、此の前、尼ヶ崎から戻つて来たあの朝のことだつた。何でもあれは秋の半ば時分であつたが、或る日、やうく夜が明けたばかりの頃、眠つてゐた庄造は「ニヤア」「ニヤア」と云ふ耳馴れた啼き声に眼を覚ました。その時分は独身者の庄造が二階に寝、母親が階下したに寝てゐたが、朝が早いのでまだ雨戸が締まつてゐるのに、つい近いところで「ニヤア」「ニヤア」と猫が啼いてゐるのを、夢うつゝのうちに聞いてみると、どうもりーの声のやうに思へて仕方がない。一と月も前に尼ヶ

崎へ遣つてしまつたものが、まさか今頃こんな所にある筈はないが、聞けば聞くほどよく似てゐる。バリ／＼と裏のトタン屋根を踏む音がして、直ぐ窓の外に来てゐるので、兎に角正体を突き止めようと急いで跳ね起きて、窓の雨戸を開けてみると、つい鼻の先の屋根の上を往つたり来たりしてゐるのが、たいそう寝やつれではあるけれどもリヽーに違ひないのであつた。庄造はわが眼を疑ふ如く、

「リヽー」

と呼んだ。するとリヽーは

「ニヤア」

と答へて、あの大きな眼を、さも嬉しげに一杯に開いて見上げな

がら、彼が立つてゐる肘掛窓の真下まで寄つて來たが、手を伸ばして抱き上げようとすると、体たいを躰かわしてすうツと二三尺じやく向うへ逃げた。しかし決して遠くへは行かないで、

「リヽー」

と呼ばれると、

「ニヤア」

と云ひながら寄つて來る。そこを掴まへようとすると、又するノヽと手の中を脱けて行つてしまふ。庄造は猫のかう云ふ性質がたまらなく好きなのであつた。わざく戻つて来るくらゐだから、余程恋ひしかつたのであらうに、そのなつかしい家に着いて、久しぶりで主人の顔を見たのでありながら、抱かうとすれば逃げて

しまふ。それは愛情に甘えるしぐさのやうでもあるし、暫く会はなかつたのがキマリが悪くて、羞^{はにか}澁んでゐるやうでもある。リヽーはさう云ふ風にして、呼ばれる度に「ニヤア」と答へつゝ屋根の上をうろくした。庄造は、彼女が瘦せてゐることは最初から気が付いてゐたけれど、なほよく見ると、一と月前よりは毛の色つやが悪くなつてゐるばかりでなく、頸の周りだの尾の周りだのが泥だらけになつてゐて、ところ／＼に薄^{すすき}の穂などが喰つ着いてゐた。貰はれて行つた八百屋の家も猫好きだと云ふ話であつたから、虐待されてゐた筈はないので、これは明かに、一匹の猫が尼ヶ崎から此処までひとりで辿つて来る道^{どうちゆう}中の難儀を語るものだつた。こんな時刻に此処へ着いたのは、昨夜ぢゆう歩きつゞ

けたのに違ひないけれども、多分一と晩ぐらゐではあるまい、もう幾晩もなく、恐らくは数日前に八百屋の家を逃げ出して、方々で道に迷ひながら、やうく此処まで来たのであらう。彼女が人家つゞきの街道を一直線に来たのではないことは、あのすゝきの穂を見ても分る。それにしても、猫は寒がりなものであるのに、朝夕の風はどんなに身に沁みたことであらう。おまけに今は村しぐれの多い季節でもあるから、定めし雨に打たれて叢くさむらへもぐり込んだり、犬に追はれて田圃たんぼの中へ隠れたりして、食ふや食はずの道中をつゞけて來たのだ。さう思ふと、早く抱き上げて撫でゝやりたくて、何度も窓から手を出したが、そのうちにリヽーの方も、羞恥みながらだんく体を擦り着けて來て、主人の為すが儘なまに任

せた。

その時のリヽーは、一週間ほど前から尼ヶ崎の方で姿を見なくなつてゐたことが、後に問ひ合はせて知れたのであつたが、今も庄造は、あの朝の啼き^なごゑと顔つきとを忘れることが出来ないのである。そればかりでなく、此の猫についてはまだ此の外にも数々の逸話があつて、あの時はあんな顔をした、あんな声を出したと云ふ記憶が、いろ／＼の場合に残つてゐるのである。たとへば庄造は、初めて此の猫を神戸から連れて來た日のことをはつきりと思ひ出すのであるが、それは最後に奉公をしてゐた神港軒から暇を貰つて蘆屋へ帰つた時であるから、彼がちやうど^{はたち}二十歳の年、つまり父親が亡くなつた年の、四十九日の頃だつた。その前彼は、

三毛猫を一度、それが死んでからは「クロ」と呼んでゐた真つ黒な雄猫を、コツク場で飼つてゐたのであるが、そこへ出入の肉屋から、歐洲種の可愛らしいのがゐるからと云つて、生後三ヶ月ばかりになる雌の仔猫を貰つたのが、リーハーだつたのである。それで暇を貰ふ時にもクロはコツク場へ置いて来てしまつたが、仔猫の方は手放すのが惜しくて、行李こうりと一緒に或る商店のリヤカーの隅へ積んで貰つて、蘆屋の家へ運んだのであつた。

肉屋の主人の話だと、英吉利人イギリスじんはかう云ふ毛並みの猫のことを籠べ
 甲猫こうねこと云ふさうであるが、茶色の全身に鮮明な黒の斑点が行き
 瓦わたつてゐて、つやくと光つてゐるところは、成る程研いた籠甲の表面に似てゐる。何にしても庄造は、今日までこんな毛並みの

立派な、愛らしい猫を飼つたことがなかつた。ぜんたい歐洲種の猫は、肩の線が日本猫のやうに怒いかつてゐないので、撫なで肩がたの美人を見るやうな、すつきりとした、イキな感じがするのである。顔も日本種の猫だと一般に寸が長くつて、眼の下あたりに凹みがあつたり、頬の骨が飛び出てゐたりするけれども、リヽーの顔は丈が短かく詰まつてゐて、ちやうど蛤はまぐりを倒さかさにした形の、カツキリとした輪郭の中に、すぐれて大きな美しい金眼きんめと、神経質にヒクうごく蠢めく鼻が附いてゐた。だが庄造が此の仔猫に惹き附けられたのは、さう云ふ毛なみや顔だちや体つきのためではなかつた。もしも外形だけで云ふなら、庄造だつてもつと美しい波斯猫ペルシャだの暹羅猫しゃらだのを知つてゐるが、でも此のリヽーは性質が実に愛ら

しかつた。蘆屋へ連れて來た当座は、まだほんたうに小さくて、
 掌てのひらの上へ乗る程であつたが、そのお転婆でやんちやなことは、と
 んと七つか八つの少女、——いたづら盛りの、小学校一二年生
 ぐらゐの女の児こと云ふ感じだつた。そして彼女は今よりもずつと
 身軽で、食事の時に食物を摘まんで頭の上へ翳かざしてやると、三四
 尺の高さまで飛び上つたので、すわつてゐては直ぐ飛び着かれて
 しまふから、しばく食事の最中に立ち上らねばならなかつた。
 彼はその時分からあの曲藝を仕込んだのであるが、箸の先に摘ま
 んだ物を、三尺、四尺、五尺、と云ふ風に、飛び着く毎にだん／＼
 高くして行くと、しまひには着物の膝へ飛び着いて、胸から肩
 へすばしつこく這ひ上つて、鼠はりが梁はりを渡るやうに、箸の先まで腕

を渡つて行つたりした。或る時などは店のカーテンに飛び着いて、天井の方までクルくと這ひ上つて、端から端へ渡つて行つて、又カーテンに掴まつて降りて来る、——そんな動作を水車のやうに繰り返した。それに、さう云ふ幼い時から非常に表情が鮮やかで、眼や、口元や、小鼻の運動や、息づかひなどで心持の変化をあらはすことは、人間と少しも違はなかつた。就中そのばつちりした大きな眼球は、いつも生きくとよく動いて、甘える時、いたづらをする時、物に狙ひを付ける時、どんな時でも愛くるしさを失はなかつたが、一番可笑しいのは怒る時で、小さい体をしてゐる癖に、やはり猫なみに背を円くして毛を逆立て、尻尾をピンと跳ね上げながら、脚を踏ん張つてぐつと睨まへる恰好と

云つたら、子供が大人の真似をしてゐるやうで、誰でもほゝ笑んでしまふのであつた。

庄造は又、リヽーが始めてお産をした時の、あの訴へるやうなやさしい眼差まなざしを、忘れることが出来ないのであつた。それは蘆屋へ連れて来てから半年ほど過ぎた時分であつたが、或る日の朝、産氣さんけづいた彼女はしきりにニヤア／＼云ひながら彼の後を追つて歩くので、サイダの空き函あ
ぱこへ古い座布団ざぶとんを敷いたのを押入の奥の方に据ゑて、そこへ抱いて行つてやると、暫くの間は函に這入つてゐるけれども、直ただきに襖を開けて出て来て、又啼きながら追ひかかる。その啼きざゑは今まで彼が聞いたことのない声だつた。「ニヤア」とは云つてゐるのだが、その「ニヤア」の中に、今ま

での「ニヤア」が含んでゐなかつた異様な意味が籠つてゐた。まあ云つてみれば、「あゝどうしたらいい」でせう、何だか急に体の工合が変なのです、不思議な事が起りさうな予感がします、こんな気持はまだ覚えがありません、ねえ、どうしたと云ふのでせう、心配なことはないのでせうか？」——と、さう云ふやうに聞えるのであつた。でも庄造が、

「心配せんかてえ、ねんで。もう直きお前、お母さんになるねんが。……」

と、さう云つて頭を撫でゝやると、前脚を膝へ乗せて来て、
縋りすがり

着くやうな様子をして、

「ニヤア」

と云ひながら、彼の言葉を一生懸命理解しようと/orするかのやうに、眼の球をキヨロ／＼させた。それからもう一度押入の所へ抱いて行つて、函の中へ入れてやつて、

「えゝか、此処にじつとしてるねんで。出て来たらあかんで。えゝなあ？ 分つてるなあ？」

と、しんみり云つて聴かせてから、襖を締めて立たうとすると、「待つて下さい、何卒どうぞそこにあるて下さい」とでも云ふやうに、又「ニヤア」

と云つて悲しげに啼いた。だから庄造もついその声に絆ほどされて、細目に開けて覗いてみると、行李こうりだの風呂敷包みだのいろいろ／＼な荷物が積んである押入の、一番奥の突きあたりにある函の中から

首を出して、

「ニヤア」

と云つては此方を見てゐる。畜生ながらまあ何と云ふ情愛のある眼つきであらうと、その時庄造はさう思つた。全く、不思議のやうだけれども、押入の奥の薄暗い中でギラ／＼光つてゐるその眼は、最早やあのいたづらな仔猫の眼ではなくなつて、たつた今の一瞬間に、何とも云へない媚びこと、色氣いろけと、哀愁とを湛へた、一人前の雌の眼になつてゐたのであつた。彼は人間の女のお産を見たことはないが、もしその女が年の若い美しい人であつたら、きつと此の通りの、恨めしいやうな切ないやうな眼つきをして、夫を呼ぶに違ひないと思つた。彼は幾度も襖を締めて立ち去りかけて

は、又戻つて来て覗いてみたが、その度毎にリヽーも函から首を出して、子供が「居ない／＼ばあ」をするやうに此方を見た。

さうしてそれが、もう十年も前のことなのである。而も品子が嫁に来たのがやうく四年前であるから、それまで六年の間と云ふもの、庄造は蘆屋の家の二階で、母親の外にはたゞ此の猫を相手にしつゝ暮らしたのである。それにつけても猫の性質を知らない者が、猫は犬よりも薄情であるとか、不愛想ぶあいそうであるとか、利己主義であるとか云ふのを聞くと、いつも心に思ふのは、自分のやうに長い間猫と二人きりの生活をした経験がなくて、どうして猫の可愛らしさが分るものか、と云ふことだつた。なぜかと云つて、猫と云ふものは皆幾分か羞恥はにかみやのところがあるので、第三者が

見てゐる前では、決して主人に甘えないのみか、へんに余所々々^{よそよそ}しく振舞ふのである。リヽーも母親が見てゐる時は、呼んでも知らんふりをしたり、逃げて行つたりしたけれども、さし向ひになると、呼びもしないのに自分の方から膝へ乗つて来て、お世辞を使つた。彼女はよく、額を庄造の顔にあてゝ、頭ぐるみぐいぐいと押して來た。さうしながら、あのザラ^{あざ}くした舌の先で、頬だの、頤だの、鼻の頭だの、口の周りだのを、所嫌はず舐め廻した。夜は必ず庄造の傍に寝て、朝になると起してくれたが、それも顔ぢゆうを舐めて起すのであつた。寒い時分には、掛け布団の襟をくゞつて、枕の方からもぐり込んで來るのであつたが、寝勝手のよい隙間を見付け出す迄は、懷の中へ這入つてみたり、股ぐらの

方へ行つてみたり、背中の方へ廻つてみたりして、やうく或る場所に落ち着いても、工合が悪いと又直ぐ姿勢や位置を変へた。結局彼女は、庄造の腕へ頭を乗せ、胸のあたりへ顔を着けて、向ひ合つて寝るのが一番都合がよいらしかつたが、もし庄造が少しでも身動きをすると、勝手が違つて来ると見えて、そのつど体をもぐくさせたり、又別の隙間を搜したりした。だから庄造は、彼女に這入つて来られると、一方の腕を枕に貸してやつたまゝ、なるべく体を動かさないやうに行儀よく寝てゐなければならなかつた。そんな場合に、彼はもう一方の手で、猫の一番喜ぶ場所、あの頸^{くび}の部分を撫でゝやると、直ぐにリヽ一はゴロヽ云ひ出した。そして彼の指に噛み着いたり、爪で引つ搔いたり、涎^{よだれ}を垂ら

したりしたが、それは彼女が興奮した時のしぐさなのであつた。

さう云へば一度庄造が布団の中で放屁を鳴らすと、その布団の上の裾の方に寝てゐたりゝが、びつくりして眼を覚まして、何か奇態な啼き声を出す怪しい奴が隠れてゐるとでも思つたのであらう、さも不審さうな眼をしながら、大急ぎで布団の中を捜し始めたことがあつた。又或る時は、嫌がる彼女を無理に抱き上げようとしたら、手から脱け出て、体を伝はつて降りて行く拍子に、非常に臭い瓦斯ガスを洩らしたのが、まともに庄造の顔にかゝつた。たしかその時は食事の後で、今御馳走を食べたばかりの、ハチ切れさうにふくらんだりゝのお腹を、偶然庄造が両手でギュツと押さへたのである。そして運悪くも、ちやうど彼女の肛門が彼の顔

の真下にあつたので、^{ちよう}腸から出る息が一直線に吹き上げたのだが、その臭かつたことゝ云つたら、いかな猫好きもその時ばかりは、

「うわツ」

と云つて彼女を床へ放り出した。^{いたち}鼬の最後ツ屁と云ふのも恐らくこんな臭さであらうが、全くそれは執拗な臭ひで、一旦鼻の先へこびり着いたら、拭いても洗つても、シャボンでゴシ／＼擦つても、その日一日ぢゅう抜けないのであつた。

庄造はよく、リヽ一のこと^で品子といさかひをした時分に、「僕リヽ一とは屁まで嗅ぎ合^{かお}うた仲や」などゝ、嫌味めかして云つたものだが、十年の間も一緒に暮らしてゐたとすれば、たとひ一匹の猫であつても、因縁の深いものがあるので、考へやうでは、福

子や品子より一層親しいとも云へなくはない。事実品子と連れ添うてゐたのは、足かけ四年と云ふけれども正味は二年半ほどであるし、福子も今のところでは、来てからやつと一ヶ月にしかならないのである。さうしてみれば長の年月を共にしてゐたり、一の方が、いろいろな場合の回想と密接につながつてゐる訳で、つまりリリ、一と云ふものは、庄造の過去の一部なのである。だから庄造は、今更手放すのが辛いのは当たり前の人情ではないか、それを物好きだの、猫気違ひだと、何か大変非常識のやうに云はれる理由がないと思ふのであつた。そして福子の迫害と、母親の説教ぐらゐで、脆くも腰が挫けてしまつて、あの大切な友達をむざむざ他人の手へ渡した自分の弱氣と腑甲斐なさとが、恨めしくな

つて来るのであつた。何で自分はもつと正直に、男らしく、道理を説いてみなかつたのだらう。何で女房にも母親にも、もつとノヽ剛情を張り通さなかつたのであらう。さうしたところで最後には矢張^{やはり}負かされて、同じ結果を見たかも知れぬが、でもそれだけの反抗もせずにしまつたのでは、リヽーに對して如何にも義理が済まないのであつた。

もしもリヽーが、あの尼ヶ崎へ遣つた時代にあれきり戻つて来なかつたとしたら?——あの時だつたら、彼も一旦^{いつたん}同意を与へて他家へ譲つたのであるから、きれいにあきらめもしたであらう。だがあの朝、トタン屋根の上で啼いてゐたのをやつと掴まへて、頬ずりをしながら抱き締めた瞬間に、あゝ、不憫なことをした、

己は残酷な主人だつた、もうどんなことがあつても誰にもやるものか、死ぬまで此処に置いてやるのだと、心に誓つたばかりでなく、リヽーとも堅い約束をした氣持だつた。それを今度、又あんな風にして追ひ出してしまつたかと思ふと、非常に薄情な、むごいことをしたと云ふ感じが胸に迫つて來るのであつた。その上可哀さうなのは、此の二三年めつきり歳を取り出して、体のこなしや、眼の表情や、毛の色つやなどに、老衰のさまがあり／＼と見えてゐたのである。全く、それもその筈で、庄造が彼女をリヤ力一へ乗せて此処へ連れて來た時は、彼自身がまだ二十歳はたちの青年だつたのに、もう来年は三十に手が届くのである。まして猫の寿命から云へば、十年と云ふ歲月は、多分人間の五六十年に當るであ

らう。それを思へば、もう一と頃の元氣がないのも道理であるとは云ふものの、カーテンの頂辺てっぺんへ登つて行つて綱渡りのやうな軽業かるわざをした仔猫の動作が、つい昨日のことのやうに眼に残つてゐる庄造は、腰のあたりがゲツソリと瘦せて、俯向うつむき加減に首をチヨコ／＼振りながら歩く今日此の頃のリヽーを見ると、諸行しょぎよ無常の理うむじょうことわりを手近に示された心地がして、云ふに云はれず悲しくなつて來るのであつた。

彼女がいかに衰へたかと云ふことを証明する事実はいくらもあるが、たとへば飛び上り方が下手になつたのもその一つの例なのである。仔猫の時分には、實際庄造の身の丈ぐらゐ迄は鮮やかに跳んで、過たずに餌あやま_{えさ}を捉へた。又必ずしも食事の時に限らないで、

いつ、どんな物を見せびらかしても、直ぐ飛び上つた。ところが歳を取る毎に飛び上の度数が少くなり、高さが低くなつて行つて、もう近頃では、空腹な時に何か食物を見せられると、それが自分の好物であるか否かをたしかめた上で、始めて飛び上るのであるが、それでも頭上一尺ぐらゐの低さにしなければ駄目なのである。もしもそれより高くすると、もう跳ぶことをあきらめて、庄造の体を登つて行くか、それだけの気力もない時は、たゞ食べたさうに鼻をヒクヒクさせながら、あの特有な哀れつぽい眼で彼の顔を見上げるのである。「もし、どうか私を可哀さうだと思つて下さい。実はお腹がたまらないほど減つてゐるので、あの餌に飛び着きたいのですが、何を云ふにも此の歳になつて、とても昔のやう

な真似は出来なくなりました。もし、お願ひです、そんな罪なことをしないで、早くあれを投げて下さい。」——と、主人の弱気な性質をすつかり呑み込んでゐるかのやうに、眼に物を云はせて訴へるのだが、品子が悲しさうな眼つきをしてもそんなに胸を打たれないのに、どう云ふものかりゝ一の眼つきには不思議な傷ましさを覚えるのであつた。

仔猫の時にはあんなに快活に、愛くるしかつた彼女の眼が、いつからさう云ふ悲しげな色を浮かべるやうになつたかと云ふと、それがやつぱりあの初産の時からなのである。あの、押入の奥のサイダの函から首を出して術なさゝうに見てゐた時、——あの時から彼女の眼差に哀愁の影が宿り始めて、そのゝち老衰が加はる

ほどだんく濃くなつて來たのである。それで庄造は、とき／＼リヽーの眼を視詰めながら、怜巧だと云つても小さい獸に過ぎないものが、どうしてこんな意味ありげな眼をしてゐるのか、何かほんたうに悲しいことを考へてゐるのだらうかと、思ふ折があつた。前に飼つてゐた三毛だのクロだのは、もつと馬鹿だつたせゐかも知れぬが、こんな悲しい眼をしたことは一度もない。さうかと云つて、リヽーは格別陰鬱な性質だと云ふのでもない。幼い頃は至つてお転婆だつたのだし、親猫になつてからだつて、相當に喧嘩も強かつたし、活潑に暴れる方であつた。たゞ庄造に甘えかゝつたり、退屈さうな顔をして日向ぼっこなどをしてゐる時に、その眼が深い憂ひに充ちて、涙さへ浮かめてゐるかのやうに、^み_{うるお}潤

ひを帶びて来ることがあつた。尤もそれも、その時分にはなまめかしさの感じの方が強かつたのだが、年を取るに従つて、ぱつちりしてゐた瞳も曇り、眼のふちには眼脂^{めやに}が溜つて、見るもトゲノヽしい、露^{あら}はな哀傷を示すやうになつたのである。で、これは事に依ると、彼女の本来の眼つきではなくて、その生ひ立ちや環境の空気が感化を与へたのかも知れない、人間だつて苦労をすると顔や性質が変るのだから、猫でもそのくらゐなことがないとは云へぬ、——と、さう考へると、尚^{なおさら}更庄造はリヽ一に済まない氣がするのである。それと云ふのは、今迄十年の間と云ふもの、成る程随分可愛がつてはやつたけれども、いつでもたつた二人ぎりの、淋しい心細い生活ばかり味^{あじわ}はせて來たのであつた。何しろ

彼女が連れて来られたのは、母親と庄造と、親一人子一人の時代だつたから、とても神港軒のコツク場のやうに賑やかではなかつた。そこへ持つて来て母親が彼女をうるさがるので、悴と猫とは二階でしんみり暮らさなければならなかつた。さう云ふ風にして六年の歳月を送つた後に、品子が嫁に来たのであるが、それは結局、此の新しい侵入者から邪魔者扱ひされることになつて、一層リヽーを肩身の狭い者にしてしまつた。

いや、もつとく済まないことをしたと思ふのは、せめて仔猫を置いてやつて、養育させればよかつたのに、仔が生れると成るべく早く貰ひ手を搜して分けてしまひ、一匹も家へ残さない方針を取つたのであつた。そのくせ彼女は実によく生んだ。外の猫が二

度お産をする間に、三度お産をした。相手は何処の猫か分らなかつたが、生れた仔猫たちは混血児あいのこで、鼈甲猫おもかげの佛ぶつを幾分か備へてゐるものだから、割合に希望者が多かつたけれども、時にはそうつと海岸へ持つて行つたり、蘆屋川の堤防の松の木蔭などへ捨てて來たりした。これは母親への気がねのためであることは云ふ迄もないが、庄造自身も、リバーが早く老衰するのは、一つは多産のせゐかも知れぬ、だから妊娠を止めることが出来ないなら、乳を飲ませることだけでも控へさせた方がよいと、さう云ふ頭で取り計らひもしたのであつた。實際彼女は、お産の度毎に眼に見えて老けて行つた。庄造は、彼女がカンガルーのやうに腹を膨らして、切なげな眼つきをしてゐるのを見ると、

「阿呆やなあ、そないに何遍も腹ぼてになつたら、お婆さんになるばかりやないか。」

と、いつも不憫さうな口調で云つた。雄なら去勢して上げるが、雌では手術しにくいと云はれて、

「そんなら、エツキス光線かけとくなはれしまへんか。」

と、さう云つて獣医に笑はれたこともあつた。だが庄造にしてみれば、それやこれやも彼女のためを思つてのことと、無慈悲な扱ひをした積りではなかつたのだが、何と云つても、身の周りから血族を奪つてしまつたことは、彼女をへんにうら淋しい、影の薄いものにしたことは否いなまれなかつた。

さう云ふ風に数へて行くと、彼は随分リヽーに「苦勞」をかけた

と云ふ氣がするのである。彼の方が彼女のお蔭で慰められてゐる
 わりに、リヽーの方は一向樂をしてゐないやうに思へるのである。
 殊に最近の一、二年、夫婦の不和と生計の困難とで始終家の中がゴ
 タヽとしてゐた間、リヽーもそれに捲き込まれて、どうしたらよ
 いか身の置きどころがないやうに狼狽うろたへてゐたことがあつた。母
 親が今津の福子の家から迎ひを寄越して、庄造に呼び出しをかけ
 たりすると、品子より先にリヽーが彼の裾へ縋つて、あの悲しい
 眼で引き止めたりした。それでも振り切つて出て行くと、犬のや
 うに後を追ひかけて、一丁も二丁も附いて來た。だから庄造も、
 品子のことよりは彼女のことが心配になつて、なるべく早く帰る
 やうにしたのであつたが、二日も三日も泊まつて來た時などは、

氣のせゐかも知れぬが、その眼の色に又一段と暗い影が添はつてゐた。

もう此の猫も余命幾いくばく何もないのではないか、——と、此の頃になつて彼はしばく、そんな予感を覚えるにつけ、さう云ふ夢を見たことも一度や二度ではないのであつた。その夢の中の庄造は、親兄弟に死に別れでもしたやうな悲嘆に沈み、涙で顔を濡らしてゐるのだが、もしほんたうにリヽ一の死に遭ふことがあつたら、彼の嘆き方は夢の中のそれにも劣らないやうな気がするのである。で、そんな工合にそれからそれへと考へ始めると、彼女をおめゝ讓つてしまつたことが、又もう一度口惜しく、情なく、腹立たしくなつて來るのであつた。そして彼女のあの眼つきが、何処か

の隅から恨めしさうに此方を見てゐるやうに思へて仕方がなかつた。今更悔んでも追つ付かないことだけれども、あんなに老衰してゐたものを、なぜむごたらしく追ひ遣つてしまつたのだらう。なぜ此の家で死なしてやらなかつたのだらう。……

「あんた、何で品子さんあの猫欲しがつてたのんか、その訳分つてなはるか。——」

その日の夕方、例になくひつそりとしたチャブ台に向つて、しょんぼり杯のふちを舐めてゐる亭主を見ながら、福子が照れ臭さうな調子で云ふと、

「さあ、何でやろ。」

と、庄造はちよつと空惚けた。そらとぼ

「リヽー自分のどこへ置いといたら、きつとあんたが会ひに来るやろ云ふところやねん。なあ、さうだつしやろが。」

「まさか、そんな阿呆らしいこと、……」

「きつとさうに違ひないねん。わて今日やつと氣イ付いたわ。あんたその手に乗らんやうにしつくなはれや。」

「分つてる、誰が乗るかいな。」

「きつとやなあ?」

「ふふ

と庄造は鼻の先で笑つて、

「念押すまでもないこツちやないか。」

と、又杯のふちを舐めた。

今日は忙しありますさかいに、もう上らんと帰りますわと、玄関先にバスケットを置いて、塚本が出て行つてしまつてから、品子はそれを提げたまゝ狭い急な段梯子を上つて、自分の部屋に当てられた二階の四畳半に這入つて行つた。そして、出入口の襖だのガラス障子だのをすつかり締め切つてしまつてから、バスケットを部屋のまん中に据ゑて、蓋を開けた。

奇妙な事に、リヽーは窮屈な籠の中から直ぐには外へ出ようとせずに、不思議さうに首だけ伸ばして暫く室内を見廻してゐた。それから漸く、ゆるくとした足どりで出て来て、かう云ふ場合に多くの猫がするやうに、鼻をヒクつかせながら部屋ぢゆうの匂を

嗅ぎ始めた。品子は二三度、

「リヽー」

と呼んでみたけれども、彼女の方へはチラリとそつけない流眄ながしめを与へたきりで、先づ出入口と押入の鬪際しきいぎわへ行つて匂を嗅いで見、次ぎには窓の所へ行つてガラス障子を一枚づゝ嗅いで見、針箱、座布団、物差、縫ひかけの衣類など、その辺にあるものを一々丹念に嗅いで廻つた。品子はさつき、鶏肉の新聞包を預かつたことを思ひ出して、その包のまゝ通り路へ置いてみたけれども、それには興味を感じないらしく、ちよつと嗅いたゞけで、振り向きもしない。そして、バサリ、バサリ、……と、畳の上に無気味な足音をさせながら、一と通り室内搜索をしてしまふと、もう



一遍出入口の襖の前へ戻つて来て、前脚をかけて開けようとする
ので、

「リヽ一や、お前けふからわての猫になつたんやで。もう何処へ
も行つたらあかんねんで。」

と、さう云つてそこに立ち塞がると、又仕方なくバサリ、バサリ
と歩き廻つて、今度は北側の窓際へ行き、恰好な所に置いてあつ
たこぎればこ小裂箱の上に上つて、背伸びをしながらガラス障子の外を眺
めた。

九月も昨日でおしまひになつて、もうほんたうの秋らしく晴れた
朝であつたが、少し寒いくらゐの風が立つて、裏の空地に聳えて
ゐる五六本のポプラーの葉が白くチラふるチラへてゐる向うに、摩ま

耶山やさん

耶山と六甲の頂が見える。人家がもつと建て込んでゐる蘆屋の二階の景色とは、大分様子が違ふのだけれども、リヽーはいつたいどんな氣持で見てゐるのだらうか。品子は図らずも、よく此の猫と二人きりで置き去りにされたことがあつたのを思ひ出した。庄造も、母親も、今津へ出かけたきり帰らないので、一人ぼつちでお茶漬を搔つ込んでゐると、その音を聞いてリヽーが寄つて来る。あゝ、さうだつた、御飯をやるのを忘れてゐたが、お腹が減つてゐるのだらうと、さすがに可哀さうになつて、残飯の上に出し雑魚やこを載せてやると、贅沢な食事に馴れてゐるせゐか嬉しさうな顔もしないで、ほんの申訳ぐらゐしか食べないものだから、つい腹が立つて、折角の愛情も消し飛んでしまふ。夜は夫の寝床を敷い

て、帰るかどうか分らない人を待ち侘びてゐると、その寝床の上へ遠慮会えしゃく釈もなく乗つて来て、のうくと脚を伸ばす憎らしさに、寝かけたところを叩き起して追ひ立てゝやる。そんな工合に、随分此の猫には当り散らしたものだけれども、再びかうして一緒に暮すやうになつたのは、やつぱり因縁と云ふのであらう。品子は自分が蘆屋の家を追ひ出されて来て、始めて此の二階に落ち着いた時にも、あの北側の窓から山の方を眺めながら、夫恋ひしさの思ひに駆られたことがあるので、今のリヽーがあゝして外を見てゐる心持もぼんやり分るやうな気がして、ふと眼頭が熱くなつて來るのであつた。

「リヽーや、さ、此方へ来て、これ食べなさい。——」

やがて彼女は、押入の襖を開けて、かねて用意をしておいたものを取り出しながら云ふのであつた。彼女は昨日塙本の端書はがきを受け取つたので、いよいよ此處へ連れて来られる珍客を歓待かんたいするため、今朝はいつもより早起きをして、牧場から牛乳を買つて来るやら、皿やお椀を揃へておくやら、――此の珍客にはフンシが必要だと気が付いて、昨夜慌てゝ炮烙ほうらくを買ひに行つたのはいゝが、砂がないのには困つてしまつて、五六丁先の普請場ふしんばから、コンクリートに使ふ砂を闇にまぎれて盗んで来るやらして、そんなものまで押入の中にこつそり忍ばせて置いたのである。で、その牛乳と、花鰹はながつお節をふりかけた御飯のお皿と、剥げちよろけの、縁ふちのかけたお椀わんを取り出すと、罐びんの牛乳をお椀へ移して、部屋の

まん中へ新聞紙をひろげた。それからお土産の包を開いて、水煮みずだににしてある鶏かしわの肉を、筍たけの皮ぐるみそれらの御馳走と一緒に並べた。そして「リヽ一や、リヽ一や」とつゞけさまに呼びながら、皿と罐とを力チャヤく打ちつけてみたりしたけれども、リヽ一はてんで聞えないふりをして、まだ窓ガラスにしがみ着いてゐるのであつた。

「リヽ一や」

と、彼女は躍起やつきになつて呼んだ。

「お前、何でそない表おもてばかり見てんのん？ お腹すいてエヘんのんか？」

さつきの塚本の話では、乗物に酔ふといけないと云ふ庄造の心づ

かひから、今朝は朝飯を与へてゐないのださうであるから、余程空腹を訴へなければならぬ筈で、本来ならば皿小鉢の鳴る音を聞いたら忽ち飛んで来るところだのに、今はその音も耳に這入らず、ひもじいことも感じないくらい、此処を逃れたい一念に駆られてゐるのであらうか。彼女は嘗て此の猫が尼ヶ崎から戻つて来た一件を聞かされてゐるので、当分の間は眼が放されないことであらうと、覚悟してゐたものゝ、でも食べものを食べててくれて、フンシへ小便を垂れるやうになつてくれたら大丈夫だと、それを頼みにしてゐたのだが、来るそうそう々からこんな調子では、直ぐにも逃げられてしまひさうに思へた。そして動物を手なづけるには、自分のやうに性急せつかちにしてはいけないと知りながら、何とか

して食べるところを見届けたさに、無理に窓際から引き離して、部屋のまん中へ抱いて来て、食べものゝ上へ順々に鼻を押しつけてやると、リヽーは脚をバタ／＼やらして、爪を立てたり引つ搔いたりするので、仕方がなしに放してしまふと、又窓際へ戻つて行つて、小裂箱こぎればこの上へ登る。

「リヽーや、これ、これを見て御覧。こゝにお前のいつち好きなものあるのに、これが分らんかいな。」

と、此方も依怙地えこじに追ひかけて行つて、鶏の肉だの牛乳だのを執拗つっこうく持ち廻りながら、鼻の先へ擦り着けるやうにしてやつても、今日ばかりはその好物の匂にも釣られなかつた。

これが全く見も知らぬ人に預けられたと云ふのではなし、兎も角

も足かけ四年の間同じ屋根の下に住み、同じ竈かまどの御飯をたべて、
 時にはたつた二人ぎりで三日も四日も留守番をさせられた仲であるのに、あんまり無愛想過ぎるではないか。それとも私にいぢめられたことを今も根に持つてゐるのだとすれば、畜生の癖に生意氣など、つい腹も立つて來るのであつたが、こゝで此の猫に逃げられてしまつたら、折角の計劃けいかくが水の泡になつた上、蘆屋の方でそれ見たことかと手を叩いて笑ふであらう、もう此の上は根較らべをして、気が折れて來るのを待つより外に仕方がない、なあに、あゝして食ひ物とフンシとを眼の前に当てがつておきさへすれば、いくら剛情を張つたつて、しまひにはお腹が減つて來るから食はずにゐられないであらうし、小便だつて垂れるであらう、

そんなことより今日は私は忙しいのだ、是非晩までにと請け合つた仕事があつたのに、朝から何一つ手を付けてゐないのだつたと、やうく彼女は思ひ返して、針箱の傍にすわつた。そして男物の銘仙の綿入を、それからせつせと縫ひにかゝつたが、ものゝ一時間もさうしてゐるうちに、直ぐ又心配になつて来るので、とき／＼様子に気を付けてみると、やがてリヽーは部屋の隅ツこの方へ行つて、壁にぴつたり寄り添うてうづくまつたまゝ、身動き一つしないやうになつてしまつた。それは全く、畜生ながらも逃れる道のないことを悟つて、観念の眼を閉ぢたとでも云ふのであらうか。人間だつたら、大きな悲しみに鎖された余り、あらゆる希望を抛^{なげう}つて、死を覚悟したと云ふところでもあらうか。品子は薄

氣味悪くなつて、生きてゐるかどうかを確かめるために、そうつと傍へ寄つて行つて、抱き起して見、呼吸を調べて見、突き動かして見ると、何をされても抵抗もしない代りに、まるで鮑の身のやうに体ぢゆうを引き締めて、固くなつてゐる様が指先に感じられる。まあ、ほんたうに、何と云ふ剛情な猫であらう。こんな工合で、いつになつたら懐く時なつがあるであらう。だが事に依ると、わざとあゝ云ふ風をして、此方の油断を見すましてゐるのではないか。今はあゝして、あきらめたやうにしてゐるけれども、重い板戸をさへ開ける猫であるから、うつかり部屋を留守にしたら、その間にゐなくなつてしまふのではないか。さう思ふと彼女は、他人のことよりも自分自身が、御飯を食べに行くことも廁かわやへ立つ

ことも出来ないのであつた。

お午^{ひる}になつて、妹の初子が

「姉さん、御飯」

と、段梯子の下から声をかけると、

「はい」

と品子は立ち上りながら、暫く部屋の中をうろくした。そして結局、メリソスの腰紐を三本つないで、リヽ一の肩から腋の下へ、十文字に襻^{たすき}をかけて、強く緊め過ぎないやうに、さうかと云つてスツボリ抜けられないやうに、何度も念を入れて締め直して、背中でしつかり結び玉を作つた。それからその紐のもう一方の端を持つて、又ひとしきりうろくしてゐたが、とうく天井から下

つてゐる電燈のコードに括り着けると、やつと安心して階下へ降りた。が、食事の間も気にかかるので、そこくにして上つて来てみると、縛られたまゝ矢張隅ツこの方へ行つて、前よりもなほ体をちぢめてゐるではないか。彼女はいつそ、自分がゐない方がいゝのかも知れない、暫くひとりにしておいたら、その間に食べるものは食べ、垂れるものは垂れるかも知れないと、さうも期待してゐたのであつたが、勿論そんな形跡もない。彼女は「チヨツ」と舌打ちをして、今も部屋のまん中に空しく置かれてある御馳走のお皿と、砂が少しも濡れてゐない綺麗なフンシとを恨めしさうに睨みながら、針箱の傍にすわる。かと思ふと、あゝ、さうだつた、あんまり長く縛つておいては可哀さうだと、又立ち上つて、

解ほどきに行つて、ついでに撫でゝみたり、抱いてみたり、駄目と知りながらも食べものをすゝめてみたり、フンシの位置を換へてみたり、それを幾度か繰り返すうちに日が暮れて来て、夕方の六時頃になると、階下したから初子が晩の御飯を知らせるので、又紐を持つて立ち上る。そんな風にして、その日は一日猫のことにかまけて、請け合つた仕事も出来ないまま、秋の夜長が更けてしまつた。十一時が鳴ると、品子は部屋を片づけてから、もう一度リヽーを縛つて、座布団を二枚も敷いた上へ臥かして、御飯と便器とを身近な所へ並べてやつた。それから自分の寝床を伸べ、あかりを消して眠りに就いたが、せめて朝になるまでには、牛乳でも鶏かしわでも何でもいゝから、孰れか一つぐらゐ食べてゐてくれないだらうか、

明日の朝眼を開いた時あのお皿が空になつてゐてくれたら、さうしてフンシが濡れてゐてくれたら、どんなに嬉しいであらうなどゝ思ふと、眼が冴えて来て寝られないまゝに、リヽーの寝息が聞えるか知らんと闇の中で耳を澄ますと、しーんと水を打つたやうで、微かな音もしてゐない。あまり静か過ぎるのが気になつて、枕から首を擡げると、窓の方は薄ぼんやりと明るいけれども、リヽーがある筈の隅ツこの方は生憎真つ暗で何も見えない。ふと思ひついて、頭の上を手さぐりして、天井から斜ツ^{はず}かひに引つ張られてゐる紐を掴んで、手繰り寄せるとな、大丈夫手答へがある。でも念のために電燈を付けて見ると、成る程ゐることはあるけれども、あの、拗ねたやうにちゞこまつて、円くなつてゐる姿勢が、昼間す

と少しも変つてゐないし、食べ物もフンシもそつくりそのままゝ並んでゐるので、又がつかりして明りを消す。そのうちに漸くとろくとしかけて、暫くしてから眼を覚ますと、もういつの間にか夜が明けてゐて、見ればフンシの砂の上に大きな塊が落してあり、牛乳のお皿と御飯のお皿がすつかり平げられてゐるので、しめたと思ふとそれが夢だつたりするのである。

だが、一匹の猫を手なづけるのは、こんなに骨の折れることなのだらうか。それともリヽーと云ふ猫が特別に剛情なのだらうか。
 尤もこれがまだ頑是^{がんぜ}ない仔猫であつたら、訳なく懐く^{なつ}のであらうけれども、かう云ふ老猫になつて来ると、人間と同じで、習慣や環境の違つた場所へ連れて来られると云ふことが、非常な打撃な

のかも知れない。そして遂には、それが原因で死ぬやうなことに
なるのかも知れない。品子はもとく、腹に一つの目算があつて
好きでもない猫を引き取つたので、こんなに手数が懸るものとは
知らなかつたが、云はゞ以前は敵同士であつた獸のお蔭で、夜も
おちく寝られないほど苦勞をさせられる因縁を思ひ合はせると、
不思議にも腹が立たないで、猫も可哀さうなら自分も可哀さうだ
と云ふ氣持が湧いて來るのであつた。考へてみれば、自分だつて
蘆屋の家を出て來た当座は、此処の二階にひとりでしよんぼりし
てゐることが此の上もなく悲しくつて、妹夫婦が見てゐない時は、
毎日毎晩泣いてばかりゐたではないか。自分だつて、二日三日は
何をする元気もなく、ろくく物も食べなかつたではないか。さ

うしてみれば、リヽーにしたつて蘆屋が恋ひしいのは当たり前だ。

庄造さんあんなに可愛がられてゐたのだものを、そのくらゐな情がなければ恩知らずだ。ましてこんなに年を取つて、住み馴れた家を追はれ、嫌ひな人の所へなんか連れて来られて、どんなに遣る瀬^{やせ}ないであらう。もしほんたうにリヽーを手なづけようと云ふなら、その心持を察してやり、何よりも安心と信頼を持たせるやうに仕向けなければならない。悲しい感情で胸が一杯になつてゐる時に、無理に御馳走をすゝめたら、誰だつて腹が立つではないか。だのに自分は、「食べるのが嫌なら小便をしろ」と、フンシ迄も突き付けた。あまりと云へば手前勝手な、心なしの遣り方だつた。いや、そのくらゐはまだいゝとして、縛つたのが一番よ

くなかつた。相手に信頼されたかつたら、先づ此方から信頼して
かゝらなければならぬのに、あれではます／＼恐怖心を起させ
る。いくら猫でも、縛られてゐては食慾も出ないであらうし、小
便も詰まつてしまふであらう。

明くる日になると、品子は縛ることを止めにして、逃げられたら
逃げられたで仕方がないと、一度胸どきようをきめた。そしてとき／＼、
五分か十分ぐらゐの間、試しに独り放つておいて、部屋を留守に
してみると、まだ剛情にちゞこまつてはゐるけれども、いゝ塩あんば
梅にわに逃げ出しさうな風も見えない。それで俄かに気を許したこ
とが悪かつたのだが、お午ひるの御飯に、今日はゆつくり食べようと
思つて、三十分ほど階下したへ降りてゐる時だつた、二階で何か、ガ

サツと云ふ音がしたやうなので、急いで上つて来てみると、襖が五寸ほど開いてゐる。多分リヽーは、そこから廊下へ出て、南側の、六畳の間を通り抜けて、折悪く開け放しになつてゐたそこの窓から屋根へ飛び出したのであらう、もうその辺には影も形も見えなかつた。

「リヽー や、……」

彼女はさすがに大きな声で喚かうとして、ついその声が出ずになつた。あんなに辛苦したかひもなく、やつぱり逃げられたかと思ふと、もう追ひかける氣力もなく、何だかホツとして、荷が下りたやうな工合であつた。どうせ自分は動物を馴らすのが下手なのだから、晩かれ早かれ逃げられるにきまつてゐるものなら、早おそ

く片がついた方がいいかも知れない。これで却つてサバ／＼して、今日からは仕事も捲るはかどであらうし、夜ものんびり寝られるであらう。それでも彼女は、裏の空地へ出て行つて、雑草の中を彼方此方搔き分けながら、

「リヽーや、リヽーや」

と、暫く呼んでみたけれども、今頃こんな所に愚図々々してゐる筈がないことは、分りきつてゐたのであつた。

リヽーが逃げて行つてから、当日の晩も、その明くる晩も、又その明くる晩も、品子は安心して寝られるどころか、さつぱり眠れないやうになつてしまつた。いつたい彼女はかんしょう癪性のせゐか、

二十六と云ふ歳のわりには眼まなこざとい方で、下女奉公をしてゐた時代から、どうかすると寝られない癖があつたものだが、今度も此の二階に引き移つてから、多分寝所の変つたのが原因であらう、殆ど正味三四時間しか寝ない晩が長い間つゞいてゐて、やうやく十日ばかり前から少し寝られるやうになりかけた所だつたのである。それがあの晩から、又眠れなくなつたのはどうしてか知らん？ 彼女は詰めて仕事をすると、直きに肩が凝つて来たり興奮したりするのであるが、此の間からリーハーのためにおくれてゐたのを取り返さうとして、余り縫ひ物に熱中し過ぎたせゐか知らん？ それに元來が冷え性なので、まだ十月の初めだと云ふのにそろ／＼足が冷えて来て、布団へ這入つても容易に温ぬくもらないのであ

る。彼女は夫に疎んぜられたそのそもくのキツカケを、ふと想ひ出して來るのであるが、それも今から考へれば、全く自分の冷え性から起つたことなのであつた。ひどく寝つきのいゝ庄造は、布団へ這入つて五分もすれば眠つてしまふのに、そこへ突然氷のやうな足に触られて、起されてしまふのが溜らたまないから、お前はそつちで寝てくれると云ふ。そんなことからつい別々に寝るやうになつたが、寒い時分には湯たんぽのことによく喧嘩のぼをした。なぜかと云つて、庄造は彼女と反対に、人一倍上氣せ性のぼなのである。分けても足が熱いと云つて、冬でも少し布団の裾へ爪先を出すべしにしないと、寝られない男なのである。だから湯たんぽで暖めてある布団へ這入ることを嫌つて、五分と辛抱してゐなかつた。

勿論それが不和を醸した根本の理由ではないけれども、しかしさう云ふ体质の相違がよい口実に使はれて、だんく独り寝の習慣を付けられてしまつたのであつた。

彼女は右の首筋から肩の方へしこりが出来て恐しく張つてゐるやうなので、とき／＼そこを揉んでみたり、寝返りを打つて枕の当るところを換へてみたりした。毎年夏から秋へかけて、陽気の変り目に右の下頬の虫歯が痛んで困るのであるが、昨夜あたりから少しズキ／＼し出したやうである。さう云へば、此の六甲と云ふ所は、これから冬になつて来ると、毎年六甲風おろしが吹いて、蘆屋などよりずっと寒さが厳しいのであると聞いてゐたけれども、もう此の頃でも夜は相当に冷え込むので、同じ阪神の間でありながら

ら、何だか遠い山国へでも来たやうな気がする。彼女は体を海老のやうにちぢこめて、無感覚になりかけた両方の足を擦り合はした。蘆屋時代には、もう十月の末になると、夫と喧嘩しながらも湯たんぽを入れて寝たのであつたが、こんな工合だと、ことしはそれまで待てないかも知れない。……

寝付かれないとあきらめてしまつて、電燈を付けて、妹から借りた先月号の「主婦之友」を、横向きに臥ながら読み出したのが、ちやうど夜中の一時であつたが、それから間もなく、遠くの方からざあツと云ふ音が近寄つて来て、直きにざあツと通り過ぎて行くのが聞えた。おや、時雨かな、と思つてみると、又ざあツとやつて来て、屋根の上を通る時分には、パラ／＼と疎^{まば}らな音を

落して、忍び足に消えて行く。暫くすると、又ざあツとやつて来る。それにつけても、リヽーは今頃何処にあるか、蘆屋へ帰つてゐるならいゝが、もしさうでもなく、路に迷つてゐるなら、こんな晩には嘸さざ雨に濡れてゐるであらう。実を云ふと、まだ塚本には逃げられたことを知らせてやらないのであるが、あれから此方、ずつとそのことが頭に引つかゝつてゐるのであつた。彼女としては早く知らしてやつた方が行き届いてゐることは分つてゐたのだが、「憚はばかりながら、とうに戻つて来てをりますから御安心下すつて結構です、いろいろお手数をかけましたが、もう御入用はありますまいな」と、皮肉交りに云はれさうなのが業ごう腹はらで、つい延びくにしてゐたのである。しかし戻つてゐるとしたら、此方の

通知を待つ迄もなく、向うからも挨拶がありさうなものだのに、何とも云つて来ないのを見ると、何処かにまごついてゐるのであらうか。尼ヶ崎の時は、姿が見えなくなつてから一週間目に戻つたと云ふのだが、今度はそんなに遠い所ではないのだし、つい三日前に通つて來たばかりの路なのだから、よもや迷ふことはないであらう。たゞ近頃は耄碌もうろくしてゐて、あの時分よりはカンも悪く、動作も鈍くなつてゐるから、三日かかるところが四日かかるやうなことはあるかも知れない。さうだとしても、おそらく明日か明後日のうちに無事に戻つて行くであらう。するとあの二人がどんな喜びやうをするか。そしてどんなに溜飲を下げるか。きっと塚本さんまでが一緒になつて、「それ見ろ、あれは亭主に捨

てられるばかりか、猫にまで捨てられるやうな女だ」と云ふであらう。いやく、階下の妹夫婦もお腹の中ではさう思ふであらうし、世間の人がみんな笑ひ物にするであらう。

その時、しぐれがまた屋根の上をパラ／＼と通つて行つた後から、窓のガラス障子に、何かがばたんと打つかるやうな音ぶがした。風が出たな、あゝ、イヤなことだ、と、さう思つてゐるうちに、風にしては少し重みのあるやうなものが、つゞいて二度ばかり、ばたん、ばたんと、ガラスを叩いたやうであつたが、かすかに、

「ニヤア」

と云ふ声が、何処かに聞えた。まさか今時分、そんなことが、……と、ぎくツとしながら、気のせゐかも知れぬと耳を澄ますと、

矢張、

「ニヤア」

と啼いてゐるのである。そしてそのあとから、あのばたんと云ふ音が聞えて來るのである。彼女は慌てゝ跳ね起きて、窓のカーテンを開けてみた。と、今度はハツキリ、

「ニヤア」

と云ふのがガラス戸の向うで聞えて、ばたん、……と云ふ音と同時に、黒い物の影がさつと掠めた。^{かす}さうか、やつぱりさうだつたのか、——彼女はさすがに、その声には覚えがあつた。此の間こゝの二階にゐた時は、とうく一度も啼かなかつたが、それは確かに、蘆屋時代に聞き馴れた声に違ひなかつた。

急いで挿し込みのネヂを抜いて、窓から半身を乗り出しながら、室内から射す電燈のあかりをたよりに暗い屋根の上を透かしたけれども、一瞬間、何も見えなかつた。想像するに、その窓の外に手すりの附いた張り出しがあるので、リヽーは多分そこへ上つて、啼きながら窓を叩いてゐたのに違ひなく、あのばたんと云ふ音とたつた今見えた黒い影とは正しくそれだつたと思へるのであるが、内側からガラス戸を開けた途端に、何処かへ逃げて行つたのであらうか。

「リヽー や、……」

と、階下したの夫婦を起さないやうに気がねしながら、彼女は闇に声を投げた。瓦が濡れて光つてゐるので、さつきのあれが時雨だつ



たことは疑ふ余地がないけれども、それがまるで謳うそだつたやうに、空には星がきらくしてゐる。眼の前を蔽ふ摩耶山の、幅広な、真つ黒な肩にも、ケーブルカアのあかりは消えてしまつてゐるが、頂上のホテルに灯の燈つてゐるのが見える。彼女は張り出しへ片膝をかけて、屋根の上へノメリ出しながら、もう一度、

「リヽーや」

と、呼んだ。すると、

「ニヤア」

と云ふ返辞をして、瓦の上を此方へ歩いて来るらしく、光る二つの眼の玉がだんく近寄つて來るのである。

燐色に

「リヽーや」

「ニヤア」

「リヽーや」

何度もく、彼女が頻繁に呼び続けると、その度毎にリヽーは返辞をするのであつたが、こんなことは、つひぞ今迄にないことだつた。自分を可愛がつてくれる人と、内心嫌つてゐる人とをよく知つてゐて、庄造が呼べば答へるけれども、品子が呼ぶと知らん顔をしてゐたものだのに、今夜は幾度でも億劫^{おつかう}がらずに答へるばかりでなく、次第に媚びを含んだやうな、何とも云へない優しい声を出すのである。そして、あの青く光る瞳を挙げて、体に波を打たせながら手すりの下まで寄つて来ては、又すうつと向う

へ行くのである。大方猫にしてみれば、自分が無愛想にしてゐた人に、今日から可愛がつて貰はうと思つて、いくらか今迄の無礼を詫びる心持も籠めて、あんな声を出してゐるのであらう。すつかり態度を改めて、庇護を仰ぐ気になつたことを、何とかして分つて貰はうと、一生懸命なのであらう。品子は初めて此の獸からそんな優しい返辞をされたのが、子供のやうに嬉しくつて、何度も呼んでみるのであつたが、抱かうとしてもなかなか掴まへられないので、暫くの間、わざと窓際を離れてみると、やがてリーは身を躍らして、ヒラリと部屋へ飛び込んで來た。それから、全く思ひがけないことには、寝床の上にすわつてゐる品子の方へ一直線歩いて来て、その膝に前脚をかけた。

これはまあ一体どうしたことか、——彼女が呆れてゐるうちに、リヽーはある、哀愁に充ちた眼差でじつと彼女を見上げながら、もう胸のあたりへ靠もたれかゝつて来て、綿フランネルの寝間着の襟へ、額をぐいぐいと押し付けるので、此方からも頬ずりをしてやると、頤だの、耳だの、口の周りだの、鼻の頭だのを、やたらに舐め廻すのであつた。さう云へば、猫は二人きりになると接吻をしたり、顔をすり寄せたり、全く人間と同じやうな仕方で愛情を示すものだと聞いてゐたのは、これだつたのか、いつも人の見てゐない所で夫がこつそりリヽーを相手に楽しんでゐたのは、これをされてゐたのだつたか。——彼女は猫に特有な日向臭ひなたくさい毛皮の匂を嗅がされ、ザラ〳〵と皮膚に引つかかるやうな、痛痒いたがゆ

い舌ぎはりを顔ぢゅうに感じた。そして、突然、たまらなく可愛くなつて来て、

「リヽ一や」

と云ひながら、夢中でぎゅツと抱きすぐめると、何か、毛皮のところ／＼に、冷めたく光るものがあるので、扱^{さて}は今の雨に濡れただなど、初めて合点が行つたのであつた。

それにしても、蘆屋の方へ帰らないで、此方へ帰つたのはなぜであらう。恐らく最初は蘆屋をめざして逃げ出したのが、途中で路が分らなくなつて、戻つて来たのではないであらうか。僅か三里か四里のところを、三日もかゝつてうろくしながら、とうく目的地へ行き着けないで引つ返して来るとは、リヽ一にしては余

り意氣地がないやうだけれども、事に依ると此の可哀さうな獣は、もうそれほどに老衰してゐるのであらう。気だけは昔に変らないつもりで、逃げてみたことはみたものゝ、視力だの、記憶力だの、嗅覚だと云ふものが、もはや昔の半分もの働きもしてくれないので、どつちの路を、どつちの方角から、どう云ふ風に連れて来られたのか見当が付かず、彼方へ行つては踏み迷ひ、此方へ行つては踏み迷ひして、又もとの場所へ戻つて来る。昔だつたら、一旦かうと思ひ込んだらどんなに路のない所でもガムシヤラに突進したものが、今では自信がなくなつて、様子の知れない所へ分け入ると怖おじけ気がついて、ひとりでに足がすくんでしまふ。きつとりーは、そんな風にして案外遠くの方までは行くことが出来ず、

此の界隈かいわいをまごくしてゐたのであらう。さうだとすれば、昨日の晩も、一昨日の晩も、夜なく此の二階の窓の近くへ忍び寄つて、入れて貰はうかどうしようかと躊躇ためらひながら、中の様子を窺うかがつてゐたのかも知れない。そして今夜も、あの屋根の上の暗い所にうづくまつて長い間考へてゐたのであらうが、室内にあかりが燈つたのと、俄かに雨が降つて來たのとで、急にあゝ云ふ啼き声を出して障子を叩く氣になつたのであらう。でもほんたうに、よく帰つて來てくれたものだ。よつぽど辛い目に遭つたればこそであらうけれども、矢張私をアカの他人とは思つてゐない証拠なのだ。それに私も、今夜に限つてこんな時刻に電燈をつけて、雑誌を讀んでゐたと云ふのは、虫が知らしたせゐなのだ。いや、考

へれば、此の三日間ちよつとも眠れなかつたのも、実はリヽーの帰つて来るのが何となく待たれたからだつたのだ。さう思ふと彼女は、涙が出て来て仕方がないので、

「なあ、リヽーや、もう何処へも行けへんなんあ。」

と、さう云ひながら、もう一遍ぎゆつと抱きしめると、珍しいことにリヽーはじつと大人しくして、いつまでも抱かれてゐるのであつたが、その、物も云はずに唯悲しさうな眼つきをしてゐる年老いた猫の胸の中が、今の彼女には不思議なくらゐはつきり見透せるのであつた。

「お前、きつとお腹なか減つてるやろけど、今夜はもう遅いよつてにな。——台所搜したら何などあるやろ思ふけど、ま、仕方ない、

此処わての家と違ふよつてに、明日の朝まで待ちなされや。」

彼女は一と言ひくに頬ずりをしてから、漸うりへを下に置いて、忘れてゐた窓の戸締まりをし、座布団で寝床を拵へてやり、あの時以来まだ押入に突つ込んであつたフンシを出してやりなどするト、リヽーはその間も始終後を追つて歩いて、足もとに絡み着くやうにした。そして少しでも立ち止まると、直ぐその傍へ走り寄つて、首を一方へ傾けながら、何度も耳の附け根のあたりを擦り着けに來るので、

「えゝ、もうえゝがな、分つてるがな。さ、此処へ来て寝なさい

く。」

と、座布団の上へ抱いて來てやつて、大急ぎであかりを消して、

やつと彼女は自分の寝床へ這入つたのであつたが、それから一分
 とたゝないうちに、忽ちすうツと枕の近くにあの日向臭い匂が
 して来て、掛け布団をもくく持ち上げながら、天鷺絨ひなたくさ
 のやうな柔かい毛の物体が這入つて來た。と、ぐいぐい頭からもぐり込ん
 で、脚の方へ降りて行つて、裾のあたりを暫くの間うろくして
 から、又上方へ上つて來て、寝間着のふところへ首を入れたな
 り動かないやうになつてしまつたが、やがてさも氣持の好さゝう
 な、非常に大きな音を立てゝ咽喉をゴロ／＼鳴らし始めた。

さう云へば以前、庄造の寝床の中でこんな工合にゴロ／＼云ふの
 を、いつも隣で聞かされながら云ひ知れぬ嫉妬を覚えたものだが、
 今夜は特別にそのゴロ／＼が大きな声に聞えるのは、よつほど上

機嫌なのであらうか、それとも自分の寝床の中だと、かう云ふ風にひぐくのであらうか。彼女はリヽーの冷めたく濡れた鼻のあたまと、へんにぶよ／＼した蹠の肉とを胸の上に感じると、全く初めての出来事なので、奇妙のやうな、嬉しいやうな心地がして、真つ暗な中で手さぐりしながら頸のあたりを撫でゝやつた。するとりヽーは一層大きくゴロ／＼云ひ出して、とき／＼＼、突然人差指の先へ、きゅツと噛み着いて歯型を附けるのであつたが、まだそんなことをされた経験のない彼女にも、それが異常な興奮と喜びの余りのしぐさであることが分るのであつた。

その明くる日から、リヽーはすつかり品子と仲好しになつてしまつて、心から信頼してゐる様子が見え、もう牛乳でも、花鰹節の

御飯でも、何でもおいしさうに食べた。そしてフンシの砂の中へ日に幾度か排泄物を落すので、いつもその匂が四畳半の部屋の中へむうツと籠るやうになつたが、彼女はそれを嗅いでゐると、いろいろくな記憶が思ひがけなくよみがへつて、蘆屋時代のなつかしい日が戻つて来たやうに感ずるのであつた。なぜかと云つて、蘆屋の家では明けても暮れても此の匂がしてゐたではないか。あの家の中の襖にも、柱にも、壁にも、天井にも、皆此の匂が滲みついてゐて、彼女は夫や姑と一緒に四年の間これを嗅ぎながら、口惜しいことや悲しいことの数々に堪へて來たのではないか。だが、あの時分には、此の鼻持ちのならない匂を呪つてばかりゐたくせに、今はその同じ匂が何と甘い回想をそゝることよ。あの時分に

は此の匂故にひとしほ憎らしかつた猫が、今はその反対に、此の匂故に如何にいとほしいことよ。彼女はそのゝち毎晩のやうにリヽーを抱いて眠りながら、此の柔順で可愛らしい獸を、どうして昔はあんなにも嫌つたのかと思ふと、あの頃の自分と云ふものが、ひどく意地の悪い、鬼のやうな女にさへ見えて來るのであつた。

さて此の場合、品子が此の猫の身柄について福子に嫌味な手紙を出したたり、塚本を通してあんなに執拗しつっこく頼んだりした動機と云ふものを、一寸説明しておかなければならぬのであるが、正直のところ、そこにはいたづらや意地悪の興味が手伝つてゐたことも確かであり、又庄造が猫に釣られて訪ねて来るかも知れないと

云ふ万一の望みもあつたであらうが、そんな眼の前のことよりも、
 実はもつと遠い／＼先のこと、——ま、早くて半年、おそらく
 一年か二年もすれば、多分福子と庄造の仲が無事に行く筈はない
 のだからと、その時を見越してゐるのであつた。それと云ふのが、
 もと／＼塚本の仲人口なこうどぐちに乗せられて嫁に行つたのが不覚だつた
 ので、今更あんな怠け者の、意氣地なしの、働きのない男なんぞ
 に、捨てられた方が仕合はせだつたかも知れないのだが、でも彼
 女としてどう考へても忌ま／＼しく、あきらめきれない気がする
 のは、当人同士が飽きも飽かれもした訳ではないのに、ハタの人
 間が小細工をして追ひ出したのだと、さう云ふ一念があるからだ
 つた。尤もそんなことを云ふと、いや、さう思ふのはお前さんの
 もつと

己惚れだ、それは成る程、姑との折合も悪かつたに違ひないけれども、夫婦仲だつてちつとも良いことはなかつたではないか、お前さんは御亭主をのろまだと云つて低能児扱ひにするし、御亭主はお前さんを我が強いと云つて鬱陶しがるし、いつも喧嘩ばかりしてゐたのを見ると、よくく性が合はないのだ、もし御亭主がほんとにお前さんを好いてゐるなら、いくらハタから押し付けて、外に女を拵へる訳がありますまいと、さう露骨には云はない迄も、塚本などのお腹の中は大概さうにきまつてゐるのだが、それは庄造と云ふ人の性質を知らないからのことなので、彼女に云はせれば、いつたいあの人はハタから強く押し付けられたら、否も応もないのである。呑氣と云ふのか、ぐうたらと云ふの

か、其の人よりも此の人がいゝと云はれると、すぐふらくとその気になつてしまふのだけれども、自分から女を拵へて古い女房を追ひ出したりする程、一途に思ひ詰める性分ではないのである。だから品子は熱烈に惚れられた覚えはないが、嫌はれたと云ふ氣もしないので、周^{まわ}りの者が智慧をつけたりそゝのかしたりしなかつたら、よもや不縁にはならなかつたらう、自分がこんな憂き目を見るのは、全くおりんだの、福子だの、福子の親父^{おやじ}だと云ふものがお膳立てをしたからなのだと、さう思はれて、少し誇張した云ひ方をすれば、生木^{なまき}_さを割かれたやうな感じが胸の奥の方にくすぶつてゐるので、未練がましいやうだけれども、どうも此のまゝでは堪忍出来ないのであつた。

しかし、それなら、うすくおりんなどのしてあることを感付かないでもなかつた時分に、何とか手段の施しやうがあつたぢらうに、——いよ／＼蘆屋を追ひ出される間際にだつて、もつと頑張つてみたらよかつたらうに、——じたいさう云ふ策略にかけては姑のおりんと好い取組だと云はれた彼女が、案外あつさり旗を卷いて、おとなしく追ん出てしまつたのはなぜであらうか、日頃の負けず嫌ひにも似合はないと云ふことになるが、そこにはやつぱり彼女らしい思はくがないでもなかつた。ありていに云ふと、今度の事は彼女の方に最初幾分の油断があつたから斯うなつたので、それと云ふのも、あの多情者の、不良少女上りの福子を、何ぼ何でも悴の嫁にしようと迄はおりんも考へてゐないであらうし、

又尻の軽い福子が、まさか辛抱する氣もあるまいと、たかをく、つてゐたからなのだが、そこに多少の目算違ひがあつたとしても、どうせ長続きのする二人でないと云ふ見透しに、今も変りはないのであつた。尤も福子は年も若いし、男好きのする顔だちだし、鼻にかける程の学問はないが女学校へも一二年行つてゐたのだし、それに何より持参金が附いてゐるのだから、庄造としては据ゑ膳の箸はしを取らぬ筈はなく、先づ当分は有卦うけに入つた氣であるだらうけれども、福子の方がやがて庄造では喰ひ足らなくなつて、浮気をせずにはゐないであらう。何しろあの女は男一人を守れないとちで、もうその方では札附ふだつきになつてゐるのだから、どうせ今度も始まることは分りきつてゐるのだが、それが眼に余るやうにな

れば、いくら人の好い庄造だつて黙つてゐられないであらうし、
 おりんにしても匙さじを投げるにきまつてゐる。ぜんたい庄造は兎に
 角として、シツカリ者と云はれるおりんにそのくらゐなことが見
 えない筈はないのだけれども、今度は慾が手伝つたので、つい無
 理な細工をしたのかも知れない。だから品子は、こゝでなまじな
 悪あがきをするよりは、一と先づ敵に勝たしておいて、徐おそろに後
 図うとを策しても晚くはないと云ふ腹なので、中々あきらめてはゐな
 いのだつたが、でもそんなことは、無論塚本に対しても噫おもむにも出
 しはしなかつた。うはべは同情が寄るやうに、なるべく哀れつぽ
 いところを見せて、心の中では、どうしてもゝう一遍だけ彼処の
 家へ戻つてやる、今に見てゐると思ひもし、又その思ひがいつか

は遂げられるだらうと云ふ望みに生きてもゐるのだつた。

それに、品子は、庄造のことをたよりない人とは思ふけれども、どう云ふものか憎むことが出来なかつた。あんな工合に、何の分別もなくふらくしてゐて、周りの人達が右と云へば右を向き、左と云へば左を向くと云ふ風だから、今度にしてもあの連中のいゝやうにされてゐるのであらうが、それを考へると、子供を一人歩きさせてゐるやうな、心こころもと許ない、可哀さうな感じがするのである。そしてもとく、さう云ふ点にへんな可愛氣のある人なので、一人前の男と思へば腹が立つこともあつたけれども、幾らか自分より下に見下して扱ふと、妙にあたりの柔かい、優しい肌合があるのでから、だんくそれに絆ほだされて抜きさしがならない

やうになり、持つて来た物までみんな注ぎ込んで、裸にされて放り出されてしまったのだが、彼女としてはそんなにまでして尽してやつたと云ふところに、尚更未練が残るのである。全く、此の一二年間のあの家の暮らしは、半分以上は彼女の痩せ腕で支へてゐたやうなものではないか。好いあんばいにお針が達者だつたから、近所の仕事を貰つて来ては夜の眼も寝ずに縫ひ物をして、どうやら凌ぎをつけてゐたので、彼女の働きがなかつたら、母親なぞがいくら威張つてもどうにもなりはしなかつたではないか。おりんは土地での嫌はれ者、庄造はある通りでさつぱり信用がなかつたから、諸払ひの滞りなどもやかましく催促されたものだが、彼女への同情があつたればこそ節季^{せつき}が越せて行つたのではないか。

それだのにあの恩知らずの親子が、慾に眼がくれてあゝ云ふ者を引ずり込んで、牛を馬に乗り換へた氣であるけれども、まあ見るがいゝ、あの女にあの家の切り盛りが出来るかどうか、持参金附きは結構だけれど、なまじそんなものがあつたら、一層嫁の氣隨氣儘きずいきままが募るであらうし、庄造もそれをアテにして怠けるであらうし、結局親子三人の思はくが皆それ／＼に外れて來るところから、争ひの種が尽きないであらう。その時分になつて、前の女房の有難みが始めてほんたうに分るので。品子はこんなふしやらではなかつた、かう云ふ時にあゝもしてくれた、かうもしてくれたと、庄造ばかりでなく、母親までがきつと自分の失策を認めて、後悔するのだ。あの女は又あの女で、さん／＼あの家を搔

き廻した揚句の果てに、飛び出してしまふのが落ちなのだ。さうなることは今から明々白々で、太鼓判を捺してやりたいくらゐであるのに、それが分らないとは憐れな人達もあればあるものよと、内心せゝら笑ひながら時機を待つ積りであるのだが、しかし用心深い彼女は、待つにつけてはリヽーを預かつておくと云ふ一策を考へついたのであつた。

彼女はいつも、上の学校を一二年でも覗いたことがあると云ふ福子に対して、教育の点では退け目を感じてゐたのであるが、でもほんたうの智慧くらべなら、福子にだつておりんにだつて負けるものかと云ふ自負心があるので、リヽーを預かると云ふ手段を思ひついた時は、我ながらの妙案にひとりで感心してしまつた。な

ぜかといつて、リヽ一さへ此方へ引き取つて置いたら、恐らく庄造は雨につけ、風につけ、リヽ一のことを思ひ出す度に彼女のことを思ひ出し、リヽ一を不憫と思ふ心が、知らず識らず彼女を憐れむ心にもならうからである。そして、さうすれば、いつ迄たつても精神的に縁が切れない理窟であるし、そこへ持つて来て福子との仲がシツクリ行かないやうになると、いよいよリヽ一が恋ひしいと共に前の女房が恋ひしくならう。彼女が未だに再縁もせず、猫を相手に佗びしく暮らしてゐると聞いては、一般の同情が集まるのは無論のこと、庄造だつて悪い気持はする筈がなく、ます／＼福子に嫌気がさすやうになるであらうから、手を下さずして彼等の仲を割くことに成功し、復縁の時期を早めることが出来る。

——ま、さうお逃あつらへ向むけきに行ゆつてくれたら仕合あわせであるが、彼女自身はさうなる見込みを立てゝゐた。たゞ問題はリヽーを素直に引き渡すかどうかと云ふことであつたが、それとても、福子の嫉妬心を煽り立てたら大丈夫うまく行くつもりでゐた。だからあの手紙の文句なんぞも、さう云ふ深謀遠慮を以て書かれてゐたので、単純ないたづらや嫌がらせではなかつたのであるが、お氣の毒ながら頭の悪い連中には、どうして私が好きでもない猫を欲しがるのか、とてもその真意が掴めツこあるまい、そしていろいろくこつけい滑稽極まる邪推よすいをしたり、子供じみた騒ぎ方をするであらうと云ふところに、抑へきれない優越感を覚えたのであつた。

兎に角、そんな訳であるから、その折角のリヽーに逃げられた時

の落胆と、思ひがけなくそれが戻つて来た時の喜びとがどんなに大きかつたとしても、畢竟それは得意の「深謀遠慮」に基づく打算的な感情であつて、ほんたうの愛着ではない筈なのだが、あの時以来、一緒に二階で暮らすやうになつてみると、全く予想もしなかつた結果が現はれて來たのである。彼女は夜なく、その一匹の日向臭い獸を抱へて同じ寝床の中に臥ながら、どうして猫と云ふものはこんなにも可愛らしいのであらう、それだのに又、昔はどうして此の可愛さが理解出来なかつたのであらうと、今では悔恨と自責の念に駆られるのであつた。大方蘆屋時代には、最初に変な反感を抱いてしまつたので、此の猫の美点が眼に這入らなかつたのであらうが、それと云ふのも、焼餅があつたからな

のである。焼餅のために、本来可愛らしいしぐさが唯もう憎らしく見えたのである。たとへば彼女は、寒い時分に夫の寝床へもぐり込んで行く此の猫を憎み、同時に夫を恨んだものだが、今になつてみれば何の憎むことも恨むこともありますはない。現に彼女も、もう此の頃では独り寝の寒さがしみ／＼こたへてゐるではないか。まして猫と云ふ獸は人間よりも体温が高いので、ひとしほ寒がりなのである。猫に暑い日は土用の三日間だけしかないと云はれるのである。さうだとすれば、今は秋の半ばであるから、老年のリーハーが暖かい寝床へ慕ひ寄るのは当然ではないか。いや、それよりも、彼女自身が、かうして猫と寝てみると、此の暖かいことはどうだ！ 例年ならば、今夜あたりは湯たんぽなしでは寝ら

れないであらうのに、今年はまだそんなものも使はないで、寒い思ひもせずにゐるのは、リヽーが這入つて来てくれるお蔭ではないか。彼女自身が、夜毎々々にリヽーを放せなくなつてゐるではないか。その外昔は、此の猫の我が儘を憎み、相手に依つて態度を変へるのを憎み、蔭日向のあるのを憎んだけれども、それもこれも、みんな此方の愛情が足らなかつたからなのだ。猫には猫の智慧があつて、ちゃんと人間の心持が分る。その証拠には、此方が今迄のやうでなく、ほんたうの愛情を持つやうになつたら、直ぐ戻つて来て此の通り馴れくしくするではないか。彼女が自分の気持の変化を意識するより、リヽーの方がより早く嗅ぎつけたくらゐではないか。

品子は今迄、猫は愚か人間に對しても、こんなにこまやかな情愛を感じたこともなく、示したこともないやうな気がした。それは一つには、おりんを始めいろいろな人から情の強じょう_{こわ}い女だと云はれてゐたものだから、いつか自分でもさう思はされてゐたせゐであつたが、此の間からリ一のために捧げ尽した辛労と心づかひとを考へる時、自分の何処にこんな暖かい、優しい情緒が潜んでゐたのかと、今更驚かれるのであつた。さう云へば昔、庄造が此の猫の世話を決して他人の手に委ねず、毎日食事の心配をし、二三日置きにフンシの砂を海岸まで取り換へに行き、暇があると蚤のみを取つてやつたりブラシをかけてやつたりし、鼻が乾いてゐはしないか、便が軟か過ぎはしないか、毛が脱けはしないかと始終気を

つけて、少しでも異状があれば薬を与へると云ふ風に、まめくしく尽してやるのを見て、あの怠け者によくあんな面倒が見られることよと、ますく反感を募らしたものだが、あの庄造のしたことを見今は自分がしてゐるではないか。而も彼女は、自分の家に住んでゐるのではないのである。自分の食べるだけのものは、自分で儲けて妹夫婦へ払ひ込むと云ふ条件だから、まるきりの居候ではないが、何かと気が置ける中にゐて、此の猫を飼つてゐるのである。これが自分の家であつたら、台所を漁つて残り物を捗すけれども、他人の家ではさうも出来ないところから、自分が食べるものを食べずに置くか、市場へ行つて何かしら見つけて来てやらねばならない。さうでなくとも、つましい上にもつましく

してゐる場合であるのに、たとひ僅かの買ひ物にもせよ、リヽーのために出^{でせん}錢^ふが殖えると云ふことは、随分痛^{いたごと}事なのである。それにもう一つ厄介なのは、フンシであつた。蘆屋の家は浜まで五六丁の距離だつたから、砂を得るには便利であつたが、此の阪急の沿線からは、海は非常に遠いのである。尤も最初の二三回は、普請場の砂があつたお蔭で助かつたけれども、生憎^{あいにく}近頃は何處にも砂なんかありはしない。さうかと云つて、砂を換へずに放つておくと、とても臭氣が激しくなつて、しまひに階下^{した}へまで匂つて來るので、妹夫婦が嫌な顔をする。よんどころなく、夜が更けてから彼女はそうツとスコツップを持つて出かけて行つて、その辺の畠の土を搔いて來たり、小学校の運動場から滑り台の砂を盗ん

で來たり、そんな晩には又よく犬に吠えられたり、怪しい男に尾つけられたり、——全く、リヽーのためでなかつたら、誰に頼まれてこんな嫌な仕事をしよう、だが又リヽーのためならばかう云ふ苦勞を厭いとはないとは、何としたことであらうと思ふと、返す／＼も、蘆屋の時分に、なぜ此の半分もの愛情を以て、此の獸をいつくしんでやらなかつたか、自分にさう云ふ心がけがあつたら、よもや夫との仲が不縁になりはしなかつたであらうし、此のやうな憂き目は見なかつたであらうものをと、今更それが悔まれてならない。考へてみれば、誰が悪かつたのでもない、みんな自分が至らなかつたのだ。此の罪のない、やさしい一匹の獸をさへ愛することが出来ないやうな女だからこそ、夫に嫌はれたのではない

か。自分にさう云ふ欠点があつたからこそ、ハタの人間が附け込んだのではないか。……

十一月になると、朝夕の寒さがめつきり加はつて、夜はとき／＼六甲の方から吹きおろす風が、戸の隙間から冷え／＼と沁み込むやうになつて來たので、品子とりゝーとは前よりも一層喰つ着いて、ひしと抱き合つて、ふるへながら寝た。そしてとうくく懐へきれずに、湯たんぽを使ひ始めたのであつたが、その時のりゝーの喜び方と云つたらなかつた。品子は夜なく、湯たんぽの温もりと猫の活氣とでぽか／＼してゐる寝床の中で、あのゴロ／＼云ふ音を聞きながら、自分のふところの中にある獸の耳へ口を寄せて、

「お前の方がわてよりよつぽど人情があつてんなんあ。」

と云つてみたり、

「わてのお蔭で、お前にまでこんな淋しい思ひさして、堪忍なあ。
。」

と云つてみたり、

「けどもう直^じきやで。もうちよつと辛抱して、くれたら、わてと一緒に蘆屋の家へ帰れるやうになるねん。そしたら今度と云ふ
今度は、三人仲よう暮らさうなあ。」

と云つてみたりして、ひとりでに涙^わが湧いて来ると、夜更^{よふ}けの、
真つ暗な部屋の中で、リヽー^{ほか}より外には誰に見られる訳でもない
のに、慌てゝ掛け布団をすっぽり被つてしまふのであつた。

福子が午後の四時過ぎに、今津の実家へ行つて来ると云つて出かけてしまふと、それまで奥の縁側で蘭の鉢をいぢくつてゐた庄造は、待ち構へてゐたやうに立ち上つて、

「お母さん」

と、勝手口へ声をかけたが、洗濯をしてゐる母親には、水の音が邪魔になつて聞えないらしいので、

「お母さん」

と、もう一度声を張り上げて云つた。

「店を頼んで。——ちよつと其処まで行つて来るよつてになあ

。」

と、ヂヤブ／＼云ふ音がふいと止まつて、

「何やて？」

と、母親のしつかりした声が障子越しに聞えた。

「僕、ちよつと其処まで行つて来るよつてに——」

「何処どこへ？」

「つい其処や。」

「何しに？」

「そないに執拗ひつこう聞かんかて——」

さう云つて、一瞬間むつとした顔つきで、鼻の孔をふくらました
が、直ぐ又思ひ返したらしく、あの持ち前の甘えるやうな口調に
なつて、

「あのなあ、ちよつと三十分ほど、球^{たまつ}撞きに行かしてくれへんか。
。」

「さうかてお前、球は撞かんちふ約束したのんやないか。」

「一遍だけ行かして工な。何せもう半月も撞いて工へんよつてに。
頼みまつさ、ほんまに。」

「えゝか、悪いか、わてには分らん。福子のある時に、答へて行
つとくなはれ。」

「何で工な。」

その妙に力張^{りきぱ}つたやうな声を聞くと、裏口の方で盥^{たらい}の上につくば
つてゐる母親にも、怍が怒つた時にするだゞつ児じみた表情が、
はつきり想像出来るのであつた。

「何で一々、女房に答へんなりまへんねん。えゝも悪いも福子に聞いてみなんだら、お母さんには云はれしまへんのんか。」

「さうやないけど、氣をつけてゝ下さいて頼まれてるねんが。」

「そしたらお母さん、福子の廻し者だつかいな。」

「阿呆らしいもない。」

さう云つたきり取り合はないで、又水の音を盛んにヂヤブ／＼と立て始めた。

「いつたいお母さん僕のお母さんか、福子のお母さんか、孰方だす？ なあ、孰方だすいな。」

「もう止めんかいな、そんな大きな声出して、近所へ聞えたたら見つともないがな。」

「そしたら、洗濯^{あと}にして、一寸^{ちよつと}こゝへ来とくなはれ。」

「もう分つてゐる、もう何も云はへんきかいに、何処なと好きなどこへ行きなはれ。」

「ま、そない云はんと、一寸來なはれ。」

何と思つたか庄造は、いきなり勝手口へ行つて、流し元にしやがんである母親の、シャボンの泡だらけな手頸^{てくび}を掴むと、無理に奥の間へ引き立てゝ来た。

「なあ、お母さん、えゝ折やよつてに、一寸これ見て貰ひまつさ

。」

「何や、急からしう、……^せ

「これ、見て御覧、——」

夫婦の居間になつてゐる奥の六畳の押入を開けると、下の段の隅ツこの、柳行李^{やなぎごうり}と用簾筈^{ようだんす}の隙間の暗い穴ぼこになつた所に、紅くもくくかたまつてゐるもののが見える。

「あすこにあるのん、何や思ひなはる。」

「あれかいな。……」

「あれみんな福子の汚れ物だつせ。あんな工合に後からく突つ込んでいて、ちよつとも洗濯せ工へんので、穢^{きたな}いもんが彼処^{あそこ}に一杯溜つてゝ、簾筈^{たんす}の抽出^{ひきだし}出かけて開けられへんねんが。」

「をかしいなあ、あの娘^このもんは先繰り洗濯屋へ出してるのんに、

……」

「さうかて、まさかお腰^{こし}だけは出されへんやろが。」

「ふうむ、あれはお腰かいな。」

「さうだんが。なんぼなんでも女の癖にあんまりだらしないさかいに、僕もう呆れてまんねんけど、お母さんかて様子見てたら分つてるのに、何で叱言レッジ云うてくれしまへん？ 僕にばつかりやかましいこと云うといて、福子にやつたら、こないな道楽されてゝも見ん振りしてなはんのんか。」

「こんな所にこんなもんが突つ込んであること、わてが何で知るかいな。……」

「お母さん」

不意に庄造はびつくりしたやうな声を挙げた。母が押入の段の下へもぐり込んで行つて、その汚れ物をこそく引き出し始めたか

らである。

「それ、どないするねん？」

「此の中綺麗にしてやろ思うて、……」

「止めなはれ、穢い！……止めなはれ！」

「えゝがな、わてに任しといたら、……」

「何ぢやいな、姑が嫁のそんなもん^{いろ}触うたりして！ 僕お母さん
にそんなことしてくれ云へしまへんで。福子にさしなはれ云うて
んで。」

おりんは聞えない振りをして、その薄暗い奥の方から、円くつく
ねてある紅い英ネルの束^{たば}を凡^{およ}そ五つ六つ取り出すと、それを両手
に抱へながら勝手口へ運んで行つて、洗濯バケツの中へ入れた。

「それ、洗うてやんなはんのんか？」

「そんなこと気にせんと、男は黙つてるもんや。」

「自分のお腰の洗濯ぐらゐ、何で福子にさゝれまへん、なあお母さん。」

「うるさいなあ、わてはこれをバケツに入れて、水張つとくだけや。こないしといたら、自分で氣イ付いて洗濯するやろが。」

「阿呆らしい、氣イ付くやうな女だつかいな。」

母はあんなことを云つてゐるけれど、きつと自分が洗つてやる気には違ひないので、尚なおさら更庄造は腹の虫が納まらなかつた。そして着物も着換へずに、厚司姿のまゝ土間の板草履を突つかけると、
ふいと自転車へ飛び乗つて、出かけてしまつた。

さつき球撞きに行きたいと云つたのは、ほんたうにそのつもりだつたのであるが、今的一件で急に胸がムシヤクシヤして来て、球なんかどうでもよくなつたので、何と云ふアテもなしに、ベルをやけに鳴らしながら蘆屋川沿ひの遊歩道を真つすぐ新国道へ上るなりひらばしと、つい業平橋を渡つて、ハンドルを神戸の方へ向けた。まだ五時少し前頃であつたが、一直線につゞいてゐる国道の向うに、早くも晩秋の太陽が沈みかけてゐて、太い帯になつた横流れの西日が、殆ど路面と平行に射してゐる中を、人だの車だのがみんな半面に紅い色を浴びて、恐ろしく長い影を曳きながら通る。ちやうど真正面まともにその光線の方へ向つて走つてゐる庄造は、鋼鉄のやうにぴかく光る舗装道路の眩しさを避けて、俯向き加減に、首

を真横にしながら、森の公設市場前を過ぎ、小路の停留所へさしかつたが、ふと、電車線路の向う側の、とある病院の壜外に、畠屋の塚本が台を据ゑてせつせと畠を刺してゐるのが眼に留まる

と、急に元氣づいたやうに乗り着けて行つて、
「忙しおまつか。」

と、声をかけた。

「やあ」

と塚本は、手は休めずに眼で頷いたが、日が暮れぬ間に仕事を片附けてしまはうと、畠へきゆツと針を刺し込んでは抜き取りながら、

「今時分、何処へ行きはりまんね？」

「別に何処へも行かしまへん。ちよつと此の辺まで来てみまして
ん。」

「僕に用事でもおましたんか。」

「いゝえ、違ひま。——」

さう云つてしまつてはつとしたが、仕方がなしに眼と鼻の間へク
シヤ／＼とした皺きざを刻んで、曖昧な作り笑ひをした。

「今此処通りかゝつたのんで、声かけてみましたんや。」

「さうだつか。」

そして塚本は、自分の眼の前に自転車を停めて突つ立つてゐる人
間になんか、構つてゐられないと云はんばかりに、直ぐ下を向い
て作業を続けたが、庄造の身になつてみれば、いくら忙しいにし

たところで、「近頃どうしてゐるか」とか、「リヽーのことはあるきらめたか」とか、そのくらゐな挨拶はしてくれてもよさゝうなものだのに、心外な氣がしてならなかつた。それと云ふのが、福子の前ではリヽー恋ひしさを一生懸命に押し隠して、リヽーの「リ」の字も口に出さないでゐるものだから、それだけ千万無量の思ひが胸に鬱積してゐる訳で、今図^{はか}らずも塚本に出遭つてみると、やれくヽ此の男に少しは切ない心の中を聞いて貰はう、さうしたら幾らか気が晴れるだらうと、すつかり当て込んでゐたのであつたが、塚本としてもせめて慰めの言葉ぐらゐ、でなければ無沙汰の詫びぐらゐ、云はなければならぬ筈なのである。なぜかと云つて、抑^{そもそも}もりヽーを品子の方へ渡す時に、その後どう云ふ待

遇を受けつゝあるか、とき／＼塚本が庄造の代りに見舞ひに行つて、様子を見届けて、報告をすると云ふ堅い約束があつたのである。勿論それは二人の間だけの申し合はせで、おりんや福子には絶対秘密になつてゐたのだが、しかしさう云ふ条件があつたらこそ大事な猫を渡してやつたのに、あれきり一度もその約束を実行してくれたことがなく、うまく人をペテンにかけて、知らん顔をしてゐるのであつた。

だが、塚本は、空惚そらとぼけてゐる訳ではなくて、日頃の商売の忙しさに取り紛れてしまつたのであらうか。こゝで遇つたのを幸ひに、一と言ぐらゐ恨みを云つてやりたいけれども、こんなに夢中で働いてゐる者に、今更呑氣らしく猫のことなんぞ云ひ出せもしない

し、云ひ出したところで、あべこべに怒鳴り付けられはしないであらうか。庄造は、夕日がだん／＼鈍くなつて行く中で、塚本の手にある畳針ばかりがいつ迄もきら／＼光つてゐるのを、見惚れるともなく見惚れながらぼんやり^{たたず}やんであるのであつたが、ちょうど此のあたりは国道筋でも人家^{じんか}が疎^{まば}らになつてゐて、南側の方には食用蛙を飼ふ池があり、北側の方には、衝突事故で死んだ人々の供養のために、まだ真新しい、大きな石の国道地蔵が立つてゐるばかり。此の病院のうしろの方は田圃つゞきで、ずうと向うに阪急沿線の山々が、ついさつきまでは澄み切つた空気の底にくつきりと襞^{ひだ}を重ねてゐたのが、もう黄昏^{たそがれ}の蒼い薄^{うすもや}靄に包まれかけてゐるのである。

「そんなら、僕、失敬しまつさ。——」

「ちとやつて来なはれ。」

「そのうちゆつくり寄せて貰ひま。」

片足をペダルへかけて、二三歩とツとツと行きかけたけれども、やつぱりあきらめきれないらしく、

「あのなあ、——」

と云ひながら、又戻つて來た。

「塚本君、えらいお邪魔しまつけど、実はちよつと聞きたいこと
がおまんねん。」

「何だす？」

「僕これから、六甲まで行つてみたろか思ひまんねんけど、……

⋮

やつと一畳縫ひ終へたところで、立ち上りかけてゐた塚本は、
「何しにいな？」

と呆れた顔をして、かゝへた畳をもう一遍トンと台へ戻した。
「さうかて、あれきりどないしてゐやら、さつぱり様子分れしま
へんさかいにな。……」

「君、そんなこと、真面目で云うてなはんのんか。置きなはれ、
男らしいもない！」

「違ひまんが、塚本君！……さうやあれへんが。」

「そやさかいに僕あの時にも念押したら、あの女に何の未練もな
い、顔見るだけでもケツタクソが悪い云ひなはつたやおまへんか

。」

「ま、塙本君、待つとくなはれ！　品子のことやあれへんが。猫のことだんが。」

「何と、猫？——」

塙本の眼元と口元に、突然ニツコリとほゝ笑みが浮かんだ。

「あゝ、猫のことだつか。」

「さうだんが。——君あの時に、品子があれを可愛がるかどうか、とき／＼様子見に行つてくれる云ひなはつたのん、覚えたはりまつしやろ？」

「そんなこと云ひましたかいな、何せ今年は、水害から此方えらい忙しおましたさかいに、——」

「そら分つてま。そやよつてに、君に行つて貰はう思うて工しまへん。」

せい／＼皮肉にさう云つた積りだつたのであるが、相手は一向感じてくれないで、

「君、まだあの猫のこと忘れられしまへんのんか。」

「何で忘れまつかいな。あれから此方、品子の奴がいちめて工へんやろか、あんぢよう懷なついてるやろかと思うたら、もうその事が心配でなあ、毎晩夢に見るぐらゐだすねんけど、福子の前やつたら、そんなことちよつとも云はれしまへんよつてに、尚のことこゝが辛つるうてく、……」

と、庄造は胸を叩いてみせながらべそを搔いた。

「…………ほんまのとこ、もう今迄にも一遍見に行こ思うてまして
んけど、何せ此のところ一ヶ月ほど、ひとりやつたらめつたに出
して貰はれしまへん。それに僕、品子に会はんならんのん叶ひま
へんよつてに、彼奴あいつに見られんやうにして、リヽーにだけそうツ
と会うて来るやうなこと、出来しまへんやろか？」

「そら、むづかしいおまんなあ。——」

好い加減に堪忍してくれと云ふ催促のつもりで、塚本はおろした
畳へ手をかけながら、

「どないしたかて見られまんなあ。それに第一、猫に会ひに来た
思はんと、品子さんに未練あるのんや思はれたら、厄介なことに
なりまんがな。」

「僕かてそない思はれたら叶ひまへんねん。」

「もうあきらめてしまひなはれ。人にやつてしまふたもん、どな
い思うたかてショウがないやおまへんか、なあ石井君。——
「あのなあ、」

と、それには答へないで、別なことを聞いた。

「あの、品子はいつも二階だつか、階下しただつか？」

「二階うちあらしおまつけど、階下へかて降りて来まつしやろ。」

「家空うちあけることおまへんやろか？」

「分りまへんなあ。——裁縫さいほうしたはりますさかいに、大たい概がい家
らしおまつけど。」

「風呂ふろへ行く時間、何時頃ごろだつしやろ？」

「分りまへんなあ。」

「さうだつか。そしたら、えらいお邪魔しましたわ。」

「石井君」

塚本は、畳を抱へて立ち上つた間に、早くも一二間離れかけた自転車の後姿に云つた。

「君、ほんまに行きはりまんのか。」

「どうするかまだ分れしまへん。兎に角近所まで行つてみまつさ
。」

「行きなはるのんは勝手だすけど、後でゴタゴタ起つたかて、係
り合ふのんイヤだつせ。」

「君もこんなこと、福子やお袋に云はんと置いとくなはれ。頼み

まつさ。」

そして庄造は、首を右みぎ
左ひだりへ揺さ振りく、電車線路を向う側へ渡つた。

これから出かけて行つたところで、あの一家の者達に顔を合はせないやうにして、こつそりりゝーに遇ふなんと云ふ巧うまい寸法に行くであらうか。いゝあんばいに裏が空地になつてゐるから、ポップラーの蔭か雑草の中にでも身を潜めて、リゝーが外へ出て来るのを気長に待つてゐるより外に手はないのだが、生憎なことに、かう暗くなつてしまつては、出て来てくれても中々発見が困難であらう。それにもうそろゝ初子の亭主が勤務先から帰つて来るで

あらうし、晩飯の支度で勝手口の方が忙しくなるであらうから、さういつ迄も空巣狙ひみたいにうろくしてゐる訳にも行かない。とすると、もつと時間の早い時に出直す方がいゝのだけれども、しかりリヽーに会へる会へないは二の次として、久し振に女房の眼を偷^{ぬす}んで、彼方此方を乗り廻せると云ふことだけでも、愉快でたまらないのであつた。実際、今日を外してしまふと、かう云ふ時はもう半月待たないと来ないのである。福子はをりく親父の所へお小遣ひをセビリに行くのだが、それが大体一ヶ月に二度、お朔^{ついたち}日前後と十五日前後とにきまつてゐて、行けば必ず夕飯を呼ばれ、早くて八九時頃に帰るのが例であるから、今日も今から三四時間は自由が楽しまれるのであつて、もし自分さへ飢ゑ

と寒さに堪へる覚悟なら、あの裏の空地に、少くとも二時間は立つてゐる余裕があるのである。だからリヽ一が晩飯の後でぶらつきに出かける習慣を、今も改めないのであるものとすれば、ひよつとしたら彼処で会へるかも知れない。さう云へばリヽ一は、食後に草の生えてゐる所へ行つて、青い葉を食べる癖があるので、尚更あの空地は有望な訳だ。——そんなことを考へながら、甲南学校前あたり迄やつて来ると、国粹堂と云ふラヂオ屋の前で自転車を停めて、外から店を覗いてみて、主人があるのを確かめてから、

「今日は」

と、表のガラス戸を半分ばかり開けた。

「えらい済んまへんけど、二十銭貸しとくなはれしまへんか。」

「二十銭でよろしおまんのか。」

知らない顔ではないけれども、いきなり飛び込んで来て心やすさうに云はれる程の仲やあれへん、と、さう云ひたげに見えた主人は、二十銭では断りもならないので、手提金庫から十銭玉を二つ取り出して、黙つて掌てのひらへ載せてやると、直ぐ向う側の甲南市場へ駆け込んで、アンパンの袋と筍たけの皮包を懐ろに入れて戻つて来て、「ちよつと台所使はしとくなはれ。」

人が好いやうでへんにづうくしいところのある彼は、さう云ふことには馴れたものなので、「何しなはんね」と云はれても「訛がありまんねん」とばかり、ニヤくしながら勝手口へ廻つて行

つて、筍たけの皮包かしわの鶏けいの肉をアルミニームの鍋へ移すと、瓦斯ガスの火を借りて水煮みずだきにした。そして「済んまへんなあ」を二十遍ばかりも繰り返しながら、

「いろいろ無心むじん云ひまつけど、今一つ聴いとくなはれしまへんか。」

と、自転車に附けるラムプの借用を申し込んだが、「此れ持つて行きなはれ」と主人が奥から出して来てくれたのは、「魚崎町三好屋」と云ふ文字のある、何処かの仕出屋しだしやの古提灯ふるぢょうちんであつた。「ほう、えらい骨董物だんなあ。」

「それやつたら大事おまへん。ついでの時に返しとくなはれ。」

庄造は、まだおもてが薄明るいので、その提灯を腰に挿して出か

けたが、阪急の六甲の停留所前、「六甲登山口」と記した大きな標柱の立つてゐる所まで来て、自転車を角の休み茶屋に預けて、そこから二三丁上にある目的の家の方へ、少し急なだらく路を登つて行つた。そして家の北側の、裏口の方へ廻つて、空地の中へ這入り込むと、二三尺の高さに草がぼうくと生えてゐる一とかたまりの叢くさむらのかげにしゃがんで、息を殺した。

こゝでさつきのアンパンを咬かじりながら、二時間の間辛抱してみよう、そのうちにリヽーが出て来てくれた、お土産の鶏かしわの肉を与へて、久しぶりに肩へ飛び着させたり、口の端を舐めさせたり、楽しいいちやつき合ひをしようと、さう云ふ積りなのであつた。いつたい今日は面白くないことがあつたのでアテもなく外へ飛び

出したら、足が自然に西の方へ向いたばかりでなく、塙本なんぞに出遭つたものだから、とうく途中で決心をして、此処まで延してしまつたのだが、かうなることゝ分つてゐたら外套を着て来ればよかつたのに、厚司の下に毛糸のシャツを着込んだだけでは、流石に寒さが身に沁みる。庄造は肩をぞくツとさせて、星がいちめんに輝き始めた夜空を仰いだ。板草履を穿いた足に冷めたい草の葉が触れるので、ふと気が付いて、帽子だの肩だのを撫でゝみると、夥しい露が降りてゐる。成る程、これでは冷える訳だ、かうして二時間もうづくまつてゐたら、風邪を引いてしまふかも知れない。だが庄造は、台所の方から魚を焼く匂が匂つて來るので、リヽーがあれを嗅ぎ付けて何処から帰つて來さうな気がして、



異様な緊張を覚えるのであつた。彼は小さな声を出して、「リヽ
一や、リヽ一や」と呼んでみた。何か、あの家の人の達には分らな
いで、猫にだけ分る合図の方法はないものかとも思つたりした。
彼がつくばつてゐる叢の前の方に、葛の葉が一杯に繁つてゐて、
その葉の中でとき／＼ピカリと光るものがあるのは、多分夜露
の玉か何かが遠くの方の電燈に反射してゐるせゐなのだけれども、
さうと知りつゝ、その度毎に猫の眼か知らんとはつと胸を躍らせ
た。……あ、リヽ一かな、やれ嬉しや！ さう思つた途端に動
悸が搏^うち出して、鳩尾^{みぞおち}の辺がヒヤリとして、次の瞬間に直ぐ又
がつかりさせられる。かう云ふと可笑^{おか}しな話だけれども、まだ庄
造はこんなヤキモキした心持を人間に対してさへ感じたことはな

いのであつた。せい／＼カフエ工の女を相手に遊んだぐらゐが
 関の山で、恋愛らしい経験と云へば、前の女房の眼を掠めて福子
 と逢引してゐた時代の、楽しいやうな、懊れつたいやうな、変に
 わくくした、落ち着かない気分、――まああれぐらゐなもの
 のだが、それでもあれは両方の親が内々で手引をしてくれ、品
 子の手前を巧く胡麻化してくれたので、無理な首尾をする必要も
 なく、夜露に打たれてアンパンを咬るやうな苦労をしないでもよ
 かつたのだから、それだけ真剣味に乏しく、逢ひたさ見たさもこ
 んなに一途いちずではなかつたのであつた。

庄造は、母親からも女房からも自分が子供扱ひにされ、一本立ち
 の出来ない低能児のやうに見做みなされるのが、非常に不服なのであ

るが、さればと云つてその不服を聴いてくれる友達もなく、悶々の情を胸の中に納めてゐると、何となく独りぼつちな、頼りない感じが湧いて來るので、そのために尚リ、一を愛してゐたのである。實際、品子にも、福子にも、母親にも分つて貰へない淋しい氣持を、あの哀愁に充ちたり、一の眼だけがほんたうに見抜いて、慰めてくれるやうに思ひ、又あの猫が心の奥に持つてゐながら、人間に向つて云ひ現はす術すべを知らない畜生の悲しみと云ふやうなものを、自分だけは読み取ることが出来る気がしてゐたのであつたが、それがお互ひに別れくにされてしまつて四十余日になるのである。そして一時は、もうそのことを考へないやうに、なるべく早くあきらめるやうに努めたことも事実だけれども、母や女

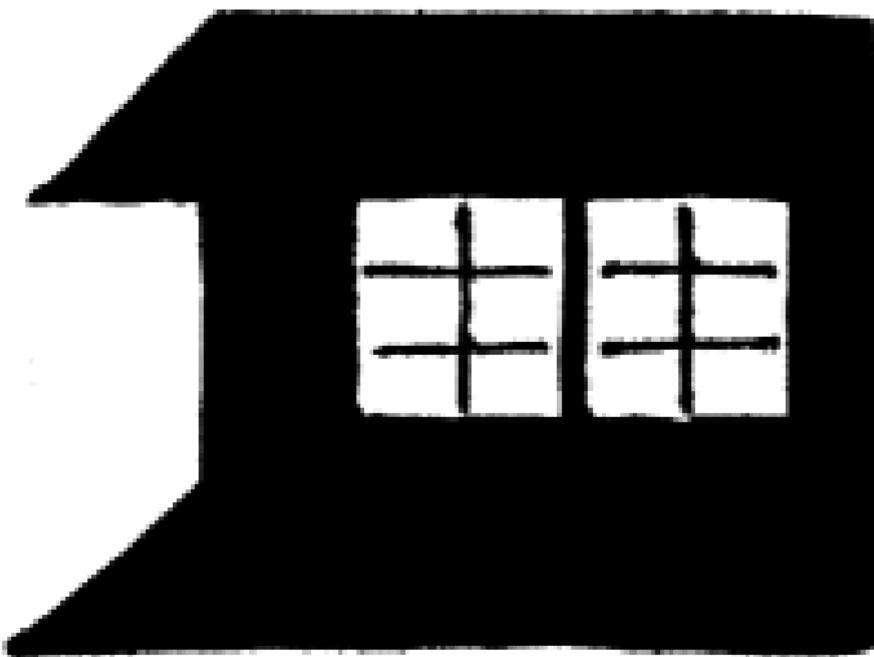
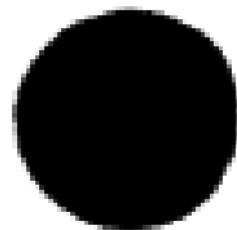
房への不平が溜つて、その鬱憤の遣り場がなくなつて来るに従ひ、いつか再び強い憧れが頭を擡げて、抑へきれなくなつたのであつた。全く、庄造の身になつてみると、あゝ云ふ厳しい足止めをされて、出るにも入るにも干渉を受けたのでは、却つて恋ひしさを焚き付けられるやうなもので、忘れようにも忘れる暇がなかつたのであるが、それにもう一つ気になつたのは、あれきり塚本から何の報告もないことであつた。あんなに約束しておきながら、どうして何とも云つて来てくれないのか。仕事が忙しいのなら已むを得ないが、ひよつとするとさうでなく、彼に心配させまいとして、何か隠してゐるのではないか。たとへば品子にいちめられて、食ふや食はずであるためにひどく衰弱してしまつたとか、逃げて

出たきり行衛ゆくえ不明になつたとか、病死したとか、云ふやうなこと
があるのでないか。あれから此方、庄造はよくそんな夢を見て、
夜中にはつと眼を覚ますと、何処かで「ニヤア」と啼いてゐるや
うに思へるので、便所へ行くやうな風をしながら、そうつと起きて
雨戸を開けてみたことも、一度や二度ではないのであるが、あ
まりたびくさう云ふ幻に欺あざむかれると、今聞いた声や夢に見た姿
は、リヽ一の幽靈ゆうれいなのではないか、逃げて来る路みちで野たれ死にを
して、魂だけが戻つたのではないかと、そんな気がして、ぞう
つと身ぶるひが出たこともある。だが又、いくら品子が意地の悪
い女でも、塚本が無責任でも、まさかりヽ一に変つたことが起つ
たら黙つてゐる筈もあるまいから、便りのないのは無事に暮らし

てゐる証拠なのだと、不吉な想像が浮かぶたびに打ち消し／＼して來たのであるが、それでも感心に女房の云ひつけを忠実に守つて、一度も六甲の方角へ足を向けたことがなかつたと云ふのは、監視が厳しかつたばかりでなく、品子の網に引つかゝるのが不愉快だからであつた。彼にはリヽーを引き取つた品子の真意と云ふものが、今でもハツキリしないのだけれども、事に依つたら、塚本が報告を怠つてゐるのも品子のさしがねではないのか、彼奴はさう云ふ風にしてわざと己に氣を揉ませて、おびき寄せようと云ふ腹ではないのかと、そんな邪推もされるので、リヽーの安否を確かめたいと願ふ一方、見す／＼彼奴の罠に嵌まつて溜るものかと云ふ反感が、それと同じくらゐ強かつたのであつた。彼は何と

かしてリヽーには会ひたいが、品子に掴まることはイヤで溜らなかつた。「どうくやつて来ましたね」と、彼奴がへんに利口ぶつて、得意の鼻をうごめかすかと思ふと、もうその顔つきを浮かべたゞけでムシヅが走つた。元来庄造には彼一流の狡さ^{する}があつて、いかにも氣の弱い、他人の云ふなり次第になる人間のやうに見られてゐるのを、巧みに利用するのであるが、品子を追ひ出したのが矢張その手で、表面はおりんや福子に操られた形であるけれども、その実誰よりも彼が一番彼女を嫌つてゐたかも知れない。そして庄造は、今考へても、いゝことをした、いゝ氣味だつたと思ふばかりで、不憫^{ふびん}と云ふ感じは少しも起らないのであつた。

現に品子は、電燈のともつてゐる二階のガラス窓の中にあるのに



違ひないのだが、雑草のかげにつくばひながらじつとその灯を見上げてみると、又してもある、人を小馬鹿にしたやうな、賢女振つた顔が眼先にちらついて、胸糞が悪くなつて来る。折角こゝまで来たのであるから、せめて「ニヤア」と云ふなつかしい声を余所ながらでも聞いて帰りたい、無事に飼はれてゐることが分りさへしたら、それだけでも安心であるし、こゝへ来た念が届くのであるから、いつそのことそうつと裏口を覗いてみたら、……アハよく行つたら、初子をこつそり呼び出して、おみやげの鶏の肉を渡して、近状を聞かして貰つたら、……と、さう思ふのであるが、あの窓の灯を見て、あの顔を心に描くと、足がすくんでしまふのである。うつかりそんな真似をしたら、初子がどう云ふ感

違ひをして、二階の姉を呼びに行かないものでもないし、少くとも後でしやべることは確かであるから、「そろく 計略が図に中つて来た」などと、己惚れるだけでも癪しゃくに触る。とすると、矢張此の空地に根気よくうづくまつてゐて、リヽーがこゝを通りかゝる偶然の機会を捉へるより外はないのであるが、しかし今迄待つて駄目なら、とても今夜は覚おぼつかない。庄造はもう、袋の中のアンパンをみんな食べてしまつた。そしてさつきから一時間半ぐらゐは経つたやうな気がするので、だんく 家の方の首尾が心配になつて來た。母親だけなら面倒はないが、福子が先に帰つて來てゐたら、今夜一と晩ぢゆう寝かして貰へないで、癌あざだらけにされる。それもいゝけれども、又明日から監視が嚴重になる。だが、

一時間半も待つあひだに微かすかな啼きごゑも洩れて来ないのは、何だか変だ、ひよつとしたら、此の間からたびく見こらた夢が正夢で、もう此の家にゐないのでないか。さつき魚を焼く匂がした時が一家の夕飯だつたとすると、リヽーもあの時何かしら与へられるであらうし、さうすればきつと草を食べに出て来るのだが、來ないのを見るとどうも怪しい。……

庄造は、とうくく懐へきれなくなつて、雑草の中から身を起すと、裏木戸の際きわまで忍んで行つて、隙間へ顔をあてゝみた。と、階下したはすつかり雨戸が締まつてゐて、子供を寝かしつけてゐるらしい初子の声がとぎれくに聞えて来る外には、何の物音もしない。二階のガラス障子にでも、ほんの一瞬間でいゝからさつと影が写

つてくれたらどんなに嬉しいか知れないのに、ガラスの向うに白いカーテンが静かに垂れてゐるばかりで、その上の方が薄暗く、下の方が明るくなつてゐるのは、品子が電燈を低く下して、夜作をしてゐるのであらう。ふと庄造は、あかりの下で一心に針を運びつゝある彼女の傍に、リヽーがおとなしく背中を円めて、「の」の字なりに臥^ねころびながら、安らかな眠を貪^{むさぼ}つてゐる平和な光景を眼前に浮かべた。秋の夜長の、またゝきもせぬ電燈の光が、リヽーと彼女とたゞ二人だけを一つ圈^わの中に包んでゐる外は、天井の方までぼうつと暗くなつてゐる室内。……夜が次第に更けて行く中で、猫はかすかに鼾^{いびき}を搔き、人は黙々と縫ひ物をしてゐる、佗びしいながらもしんみりとした場面。……あのガラス窓の中

に、さう云ふ世界が繰りひろげられてゐるとしたら、——何か奇蹟的なことが起つて、リヽーと彼女とがすつかり仲好しになつてゐたとしたら、——もしほんたうにそんな光景を見せられたら、焼餅を焼かずにゐられるだらうか。正直のところ、リヽーが昔を忘れてしまつて現状に満足してゐられても、矢張腹が立つであらうし、さうかと云つて、虐待されてゐたり死んでゐたりしたのでは尚悲しいし、孰方にもしても気が晴れることはないのだから、いつそ何も聞かない方がいゝかも知れない。庄造は、途端とたんに階下の柱時計が「ぼん、……」と、半を打つのを聞いた。七時半だ、——と思ふと、彼は誰かに突き飛ばされたやうに腰を浮かしたが、二た足三足行つてから引つ返して来て、まだ大事さうに懷に

入れてゐた筈の皮包を取り出すと、それを木戸口や、五味箱の上や、彼方此方へ持つて行つてウロ／＼した。何処か、リヽーだけが気が付いてくれるやうな所へ置いて行きたいが、叢の中では犬に嗅ぎ付けられさうだし、此の辺へ置いたら家の者が見つけるであらうし、巧い方法はないか知らん。いや、もうそんなことに構つてはゐられぬ。遅くも今から三十分以内に帰らなかつたら、又一と騒ぎ起るかも知れぬ。「あんた、今頃まで何してゝん！」――

――と、さう云ふ声が俄かに耳のハタで聞えて、福子のイキリ立つた剣幕があり／＼と見える。彼は慌てゝ葛の葉の繁つてゐる間へ、筈の皮を開いて置いて、両端へ小石を載せて、又その上から適当に葉を被かぶせた。そして空地を横ツ飛びに、自転車を預けた茶

屋のところまで夢中で走つた。

その晩、庄造よりも二時間程おくれて帰つて来た福子は、弟を連れて拳闘を見に行つた話などをして、ひどく機嫌が好かつた。そして明くる日、少し早めに夕飯を済ますと、

「神戸へ行かして貰ひまつせ。」

と、夫婦で新開地の聚樂館じゅらくかんへ出かけた。

おりんの経験だと、福子はいつも今津の家へ行つて來た当座、つまり懐ふとこころにお小遣のある五六日か一週間のあひだと云ふものは、きまつて機嫌がいゝのである。此のあひだに彼女は盛んに無駄使ひをして、活動や歌劇見物などにも、二度ぐらゐは庄造を誘つて行

く。従つて夫婦仲も睦じく、至極円満に治まつてゐるのだが、一週間目あたりからそろく懐が淋しくなつて、一日家でごろくしながら、間食あいだぐひをしたり雑誌を読んだりするやうになり出すと、とき／＼亭主に口叱言くちごことを云ふ。尤も庄造も、女房の景気のいゝ時だけ忠実振りを發揮して、だんく出るものが出なくなると、現金に態度を変へ、浮かぬ顔をして生返事なまへんじをする癖があるのだが、結局双方から飛ばつちりを食ふ母親が、一番割が悪いことになる。だからおりんは、福子が今津へ駆け付ける度に、やれくこれで当分は安心だと思つて、内々ほつとするのであつた。で、今度もちやうどさう云ふ平和な一週間が始まつてゐたが、神戸へ行つてから三四日たつた或る日の夕方、亭主と二人晩飯のチ

ヤブ台に向つてゐた福子は、

「こなひだの活動、ちよつとも面白いことあれへなんだなあ。」
と、自分も行ける口なので、ほんのり眼のふちへ酔ひを出しながら、

「——なあ、あんたどない思うた?」

と、さう云つて銚子を取り上げると、庄造がそれを引つたくるやうにして此方からさした。

「一つ行こ。」

「もう、あかん。……酔うたわ、わて。」

「まあ、行こ、もう一つ。……」

「家で飲んだかて、おいしいことあれへん。それより明日何処ぞ

へ行けへん?」

「えゝなあ、行きたいなあ。」

「まだお小遣ちよつとも使うて工へんねんで。……こなひだの晩、家で御飯たべて出て、活動見たゞけやつたやろ、そやさかいに、まだあんと持つてるねん。」

「何処にせう、そしたら?.....」

「宝塚、今月は何やつてるやろ?」

「歌劇かいな。——」

「^{あと}後に旧温泉と云ふ楽しみはあるにしてからが、何だかもう一つ気が乗らない顔つきをした。

「——そないにたんとお小遣あるのんやつたら、もつと面白い

「ことないやろか。」

「何ぞ考へて工な。」

「紅葉見に行けへん?」

「箕面かいな。」

「箕面はあかんねん、こなひだの水ですつくりやられてしもてん。
それより僕、久し振りで有馬ありまへ行つてみたいねんけど、どうや、
賛成せ工へんか。」

「ほんに、…………あれ、いつやつたやろ?」

「もうちやうど一年ぐらゐ…………いや、さうやないわ、あの時河かじか
鹿が啼いてたわ。」

「さうや、もう一年半になるで。」

それは二人が人目を忍ぶ仲になり出して間もない時分、或る日瀧たきみち道の終点で落ち合ひ、神有電車で有馬へ行つて、御所の坊ぼう二階座敷で半日ばかり遊んで暮らしたことがあつたが、涼しい渓けい川かわの音を聞きながら、ビールを飲んでは寝たり起きたりして過した、楽しかつた夏の日のことを、二人ともはつきり思ひ出した。

「そしたら、又御所の坊の二階にせうか。」

「夏より今の方がえゝで。紅葉見て、温泉に這入つて、ゆつくり晩の御飯食べて、——」

「さうせう、さうせう、もうそれにきめたわ。」

その明くる日は早お昼の予定であつたが、福子は朝の九時頃からぽつゝ身支度に取りかゝりながら、

「あんた、汚い頭やなあ。」

と、鏡の中から庄造に云つた。

「さうかも知れん、もう半月ほど床屋へ行けへんさかいにな。」

「そしたら大急ぎで行つて来なはれ、今から三十分以内に。——

——

「そらえらいこツちや。」

「そんな頭してたら、わてよう一緒に歩かんわ。——早うしな
はれ！」

庄造は、女房が渡してくれた一円札を、左の手に持つてヒラく
させながら、自分の店から半丁程東にある床屋の前まで駆けて行
つたが、いゝあんばいに客が一人も来てゐないので、

「早いとこ頼みまつさ。」

と、奥から出て来た親方に云つた。

「何處ぞ行きはりまんのんか。」

「有馬へ紅葉見に行きまんね。」

「そら宜よろしおまんなんあ、奥さんも一緒だつか?」

「さうだんね。——早お昼たべて出かけるさかい、三十分で頭刈つて来なはれ云はれてまんね。」

が、それから三十分過ぎた時分、

「お楽しみだんなあ、ゆつくり行つて来なはれ。」

と、背中から親方が浴びせる言葉を聞き流して、家の前まで戻つて来て、何心なく店へ一と足踏み込むと、そのまま土間に立ちす

くんでしまつた。

「なあ、お母さん、何で今日までそれ隠してはりましてん。……」

と、突然さう云ふたゞならぬ声が奥から聞えて来たからである。

「…………何でそんなことがあつたら、わてに云うとくなはれしまへん。…………そしたらお母さん、わての味方してゐるみたいに見せかけといて、いつもそんなことさせてはつたんと違ひまつか。……」

福子が大分お冠かんむりを曲げてゐるらしいことは甲かんだい高い物の云ひ方で分る。母親の方は明かに遣り込められてゐる様子で、たまに一と言二た言ぐらゐ口返答をするけれども、胡麻化すやうにコソく

と云ふので、よく聞えない。福子の怒鳴る声ばかりが筒抜けに響いて來るのである。

「…………何？ 行つたとは限らん？…………阿呆らしい！ 人の家の台所借つて、鶏の肉煮かしわ_{いた}たりして、リヽ一の所とこやなかつたら、何所どこへ持つて行きまんね。…………それにしたかて、あの提ちよ灯うちん持つて帰つて、あんな所に直してあつたこと、お母さん知つたはりましたんやろ？…………」

彼女が母親を摑まへて、あんなキンくくした声を張り上げることはめつたにないのだが、しかしたつた今、彼が床屋へ行つてゐた僅かな間に、どうやら先日の国粹堂が、あの時の立て換へと古提灯とを取り返しに來たのだと見える。ありていに云ふと、あの晩

庄造はある提灯を自転車の先にぶら下げて帰つて、福子に見咎められないやうに、物置小屋の棚の上に押し上げて置いたのであるが、お袋には見当がついてゐた筈だから、出して渡してやつたのが、おも知れない。だが国粹堂は、いつでもいゝやうにと云つてゐながら、何で取り返しに來たのだらう。まさかあんな古提灯が惜しいこともあるまいに、此の辺についてゞもあつたのだらうか、それとも二十銭を借りつ放しにされたのが、腹が立つたのだらうかそれに又、親父が來たのか、小僧が來たのか知らないが、鶏の話までして行かないでもいゝではないか。

「…………わてはなあ、相手がリヽーだけやつたら、何もうるさいこと云へしまへんで。リヽーに会ひに行く云うても、リヽーだけ

やあれへんさかいに、云ひまんねんで。いつたいお母さん、あの人とグルになつて、わてを欺すだまやうなことして、済むと思うたはりまんのんか。」

さう云はれると、流石さすがのおりんもグウの音も出ないで、小さくなつてゐるのであるが、悻の代りに怒られてゐるのは可哀さうのやうでもあり、一寸いゝ氣味のやうでもある。何にしても庄造は、自分がゐたら中々福子の怒り方が此のくらゐでは済むまいと思ふと、危あやうく虎口ここうを逃れた気がして、スハといへば戸外おもてへ飛び出せるやうに、身構へをしながら立つてゐると、

「……いゝえ、分つてま！ あの人六甲へ遣つたりして、今度はわてを追ひ出す相談してなはるねん。」

と、云ふのにつゞいてどたんと云ふ物音がして、

「待ちいな！」

「放しとくなはれ！」

「さうかて、何処へ行くねんな。」

「お父さん所ところへ行つて来ます、わての云ふことが無理か、お母さんの云ふことが無理か、——」

「ま、今庄造が戻るさかいに——」

どたん、どたん、と、二人が盛んに争ひながら店の方へ出て来さうなので、慌てゝ庄造は往来へ逃げ延びて、五六丁の距離を夢中で走つた。それきり後がどうなつたことやら分らなかつたが、気が付いてみると、いつか自分は新国道のバスの停留所の前に来て、

さつき床屋で受け取つた釣銭の銀貨を、まだしつかりと手の中に握つてゐた。

ちやうどその日の午後一時頃、品子が朝のうちに仕上げた縫物を、近所まで届けて来ると云つて、不斷着の上に毛糸のショールを引つかけて、小走りに裏口から出て行つたあと、初子がひとり台所で働いてゐると、その障子をごそツと一尺ばかり開けて、せい／＼息を切らしながら庄造が中を覗き込んだので、

「あらツ」

と、飛び上りさうにすると、ピヨコンと一つお時儀じぎをしながら笑つてみせて、

「初ちゃん、……」

と云つてから、後ろの方に気を配りつゝ急にひそく声になつて、
「…………あの、今此処から品子出て行きましたやろ？」

と、セカ／＼した早口で云つた。

「…………僕今そこで会うてんけど、品子は氣イ付けしまへなんだ。
僕あのポプラーの蔭に隠れてましたよつてにな。」

「何ぞ姉さんに用だつか？」

「滅相な！ り／＼に会ひに来ましてんが。——」

そして、そこから庄造の言葉は、さも思ひ余つた、哀れつぽい切
ない声に變つた。

「なあ、初ちゃん、あの猫何処にいてます？…………済んまへんけ

ど、ほんのちよつとでえゝさかい、会はしとくなはれ！」

「何處ぞ、その辺にいてしまへんか。」

「そない思うて、僕此の近所うろくして、もう二時間も彼処に立つてましてんけど、ちよつとも出て来よれしまへんねん。」

「そしたら、二階にいてるかしらん？」

「品子もう直ぐ戻りまつしやろか？ 今頃何処へ行きましたんや

？」

「ほんそこまで仕立物届けに。——一二三丁の所だすよつて、直ぐ帰りまつせ。」

「あゝ、どうしよう、あゝ困つた。」

さう云つて仰山に体をゆすぶつて、地団駄じだんだを踏みながら、

「なあ、初ちゃん、頼みます、此の通りや。——
と、手を擦り合はせて拝む真似をした。

「——後生一生のお願ひだす、今の間に連れて来とくなはれ。
「会うて、どないしやはりまんね。」

「どうもかうもせえしまへん。無事な顔一と眼見せてもらたら、
気が済みまんねん。」

「連れて帰りはれしまへんやろなあ？」

「そんなことしまつかいな。今日見せてもらたら、もうこれつき
り来けえしまへん。」

初子は呆れた顔をして、穴の明くほど庄造を視詰めてゐたが、何
と思つたか黙つて二階へ上つて行つて、直ぐ段梯子の中段まで戻

つて来ると、

「いてまつせ。——」

と、台所の方へ首だけ突ん出した。

「いてまつか？」

「わて、よう抱きまへんよつて、見に来とくなはれ。」

「行つても大事おまへんやろか。」

「直ぐ降りとくなはれや。」

「宜しおま。——そしたら、上らして貰ひまつさ。」

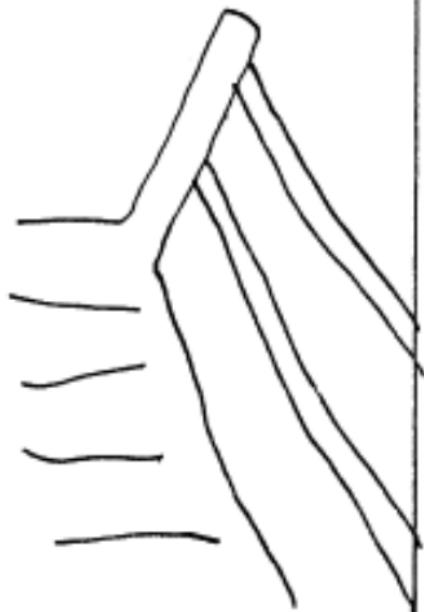
「早いことしなはれ！」

庄造は、狭い、急な段梯子を上る間も胸がドキくした。やう／＼日頃の思ひが叶つて、会ふことが出来るのは嬉しいけれども、

どんな風に変つてゐるだらうか。野たれ死にもせず、行くへ不明にもならないで、無事に此の家やにあるてくれたのは有難いが、虐待されて、痩せ衰へてゐなければいゝが、……まさか一と月半の間に忘れる筈はないだらうけれど、なつかしさうに傍へ寄つて来てくれるか知らん？ それとも例の、羞涩はにかんで逃げて行くか知らん？……蘆屋の時代に、二三日家を空けたあとで帰つて来ると、もう何処へも行かせまいとして、縋り着いたり舐め廻したりしたものであつたが、もしもあんな風にされたら、それを振り切るのに又もう一度辛い思ひをしなければならない。……

「此処だつせ。——」

晴れ／＼とした午後の外光を遮つて、窓のカーテンが締まつてゐ



るのは、大方用心深い品子が出て行く時にさうしたのであらうか。
 ——そのために室内がもやくと翳つて、薄暗くなつてゐる中に、信樂燒しがらきやきのナマコの火鉢が置いてあつて、なつかしいリヽ一
 はその傍に、座布団を重ねて敷いて、前脚を腹の下へ折り込んで、背を円くしながらうつらゝ眼をつぶつてゐた。案じた程に瘦せてゐないし、毛なみもつやくとしてゐるのは、相當に優遇されてゐるからであらう。思つたよりも大事にされてゐる証拠には、彼女のために専用の座布団が二枚も設けてあるばかりではない、たつた今、お昼の御馳走に生卵を貰つたと見えて、きれいに食べ尽した御飯のお皿と、卵の殻とが、新聞紙に載せて部屋の片隅に寄せてあり、又その横には、蘆屋時代と同じやうなフンシさへ置

いてあるのである。と、突然庄造は、久しい間忘れてゐたあの特有の匂を嗅いだ。嘗て我が家の柱にも壁にも床にも天井にも沁み込んでゐたあの匂が、今は此の部屋に籠つてゐるのであつた。彼は悲しみがこみ上げて来て、

「リヽー、……」

と覚えず濁声だみごえを挙げた。するとリヽーはやうくそれが聞えたのか、どんよりとした慵ものうげな瞳を開けて、庄造の方へひどく無愛想な一瞥いちべつを投げたが、たゞそれだけで、何の感動も示さなかつた。彼女は再び、前脚を一層深く折り曲げ、背筋の皮と耳朶じだとをブルン！ と寒さうに痙攣させて、睡ねむくて溜たまらぬと云ふやうに眼を閉ぢてしまつた。

今日はお天氣がいゝ代りに、空気が冷えくと身に沁むやうな日であるから、リヽーにしたら火鉢の傍を離れるのがイヤなのであらう。それに胃の腑がふくらんでゐるので、尚なおさら更大儀なのでもあらう。此の動物の無精な性質を呑み込んでゐる庄造は、かう云ふそつけない態度には馴れてゐるので、格別あや訝しみはしなかつたが、でも氣のせゐか、その夥おびただしく眼やにの溜つた眼のふちだの、妙にしよんぼりとうづくまつてゐる姿勢だのを見ると、僅かばかり会はなかつた間に、又いちじるしく老いぼれて、影が薄くなつたやうに思へた。分けても彼の心を打つたのは、今瞳の表情であつた。在来とてもこんな場合に睡さうな眼をしたとは云へ、今日のはまるで行路病こうろびょうしや者のそれのやうな、精せいも根こんも涸かれ果てた、

疲労しきつた色を浮かべてゐるではないか。

「もう覚えて工しまへん。——畜生だんなあ。」

「阿呆らしい、人が見てたらあないに空そらとほ惚ぼけまんねんが。」

「さうだつしやろか。……」

「さうだんが。……そやさかいに、……済んまへんけど、ほんちよつとの間ま、初ちやん此処に待つてゝくれて、此の襖締めさしつくなはれしまへんか。……」

「そないして、何しやはりまんね。」

「何もせえしまへん。……たゞ、あの、ちよつと、……膝の

上に抱いてやりまんねん。……」

「さうかて、姉さん帰つて来まつせ。」

「そしたら、初ちゃん、そつちの部屋から門見張つてゝ、見えた
ら直ぐに知らしとくなはれ。頼みまつさ。……」

襖に手をかけてさう云つてゐるうちに、もう庄造はずる／＼と部
屋へ這入つて、初子を外へ締め出してしまつた。そして、

「リヽー」

と云ひながら、その前へ行つて、さし向ひにすわつた。

リヽーは最初、折角^{せつかく}昼寝してゐるのにうるさい！ と云ふやう
な横着さうな眼をしばだいたが、彼が眼やにを拭いてやつたり、
膝の上に乗せてやつたり、頸すぢを撫でゝやつたりすると、格別
嫌な顔もしないで、される通りになつてゐて、暫くするうちに咽の
喉をゴロ／＼鳴らし始めた。

「リヽーや、どうした？　体の工合悪いことないか？　毎日々々、可愛がつてもろてるか？」

庄造は、今にリヽーが昔のいちやつきを思ひ出して、頭を押し着けに来てくれるか、顔を舐め廻しに来てくれるかと、一生懸命いろくの言葉を浴びせかけたが、リヽーは何を云はれても、相変らず眼をつぶつたまゝゴロヽ云つてゐるだけであつた。それでも彼は背中の皮を根気よく撫でゝやりながら、少し心を落ち着けて此の部屋の中を眺めてみると、あの几帳面で癪性な品子の遣り方が、ほんの些細な端々はしばしにもよく現はれてゐるやうに感じた。たとへば彼女は、僅か二三分の間留守にするにも、ちゃんとからうしてカーテンを締めて行くのである。のみならず此の四畳

半の室内に、鏡台だの、箪笥だの、裁縫の道具だの、猫の食器だの、便器だの、さま／＼なものと並べて置きながら、それらが一糸乱れずに、それ／＼整然と片寄せられて、鏝の突き刺してある火鉢の中を覗いてみても、炭火を深くいけ込んだ上に、灰が綺麗に筋目を立てゝならしてあり、三徳の上に載せてある瀬戸引の薬罐やかんまでが、研ぎ立てたやうにピカ／＼光つてゐるのである。

が、それはまあ不思議はないとしても、奇妙なのはあの皿に残つてゐる卵の殻だった。彼女は自分で食ひ扶持くぶち稼いでゐるので、決して楽ではないであらうに、貧しい中でもリヽーに滋養分を与へると見える。いや、さう云へば、彼女が自分で敷いてゐる座布団に比べて、リヽーの座布団の綿の厚いことはどうだ。いつたい

彼女は何と思つて、あんなに憎んでゐた猫を大事にする気になつたのであらう。

考へてみると庄造は、云はゞ自分の心がらから前の女房を追ひ出してしまひ、此の猫にまでも数々の苦労をかけるばかりか、今朝は自分が我が家の闌しきい_{いまた}を跨ぐことが出来ないで、ついふらくと此処へやつて来たのであるが、此のゴロく云ふ音を聞きながら、咽むせるやうなフンシの匂を嗅いでゐると、何となく胸が一杯になつて、品子も、リヽーも、可哀さうには違ひないけれども、誰にもまして可哀さうなのは自分ではないか、自分こそほんたうの宿なしではないかと、さう思はれて來るのであつた。

と、その時ばたくと足音がして、

「姉さんもうついそこの角まで来てまつせ。」

と、初子が慌しく襖を開けた。

「えツ、そら大変や！」

「裏から出たらあきまへん！……表へ、……表へ廻んなはれ
！……は穿き物ものわてが持つて行いたげる！ 早よ、早よ！」

彼は転げるやうに段梯子を駈け下りて、表玄関へ飛んで行つて、初子が土間へ投げてくれた板草履を突っかけた。そして往来へ忍び出た途端に、チラと品子の後影が、一と足違ひで裏口の方へ曲つて行つたのが眼に留まると、恐い物にでも追はれるやうに反対の方角へ一散に走つた。

（昭和十一年一月号、七月号「改造」）

青空文庫情報

底本：「猫と庄造と二人のをんな」中公文庫、中央公論新社

2013（平成25）年7月25日初版発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第十四巻」中央公論社

1982（昭和57）年6月25日

初出：「改造 新年号 第十八巻第一号」

1936（昭和11）年1月1日発行

「改造 七月特大号 第十八巻第七号」

1936（昭和11）年7月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-

86) を、大振りにつくつています。

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそつて、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※誤植を疑つた箇所を、底本の親本の表記にそつて、あらためました。なお、底本の親本と初刊本「猫と庄造と二人のをんな」創元社（1946（昭和21）年9月20日再版発行）と「谷崎潤一郎全集 第十八巻」中央公論新社（2016（平成28）年5月10日初版発行）との表記は同じでした。

※安井曾太郎（1888年5月17日～1955年12月14日）の挿絵を同様しました。

※猫・カーテン・窓の画は「猫と庄造と二人のをんな」創元社、

昭和14年9月10日普及版第13版発行からとりました。底本は白黒
画像です。

入力：砂場清隆

校正：悠悠自炊

2019年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

猫と庄造と二人のをんな

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>